

社会科学の方法：都市

小 谷 清

この論文は2部に分かれている。第I部では社会科学、または社会に関する科学的理論がいかにあるべきかを論ずる。この深刻な響きを持つ問への第I部の答えは大塚（1966）とは違って単純である。だから第I部の中心は、当たり前というべき科学の条件を多くの既存の通説的社会理論が満たしていないこと、そのため理論として破綻していることを示すことである。批判ばかりしていても仕方がないという、予想される第I部に対する批判に応えるために、第II部では科学的とはいえない理解が通説となっている都市論（特定の都市形態が生じる原因の研究）で第I部の原則に則った科学的な社会理論の具体例を示す。もちろん、都市論そのものとしても第II部は興味深いものと信じる。

第I部・第II部は関連したものであるが、それぞれ独立に読めるように意図されている。社会理論のあり方には興味があるが、都市論には興味がない読者には第I部だけで十分である。都市論にのみ興味のある読者には第II部だけで十分である。

I 社会科学の方法

科学とは対象が自然現象であれ社会現象であれ、対象を理解するという人間の日常的行為である。だから、一部の社会理論家の言うように社会科学と自然科学で対象以外の相違があるわけではない。ビッグ・バンや進化論といった自然科学分野もあるから、実験不可能性・歴史性は社会科学を自然科学から区別

するものではない。「科学とは理解すること」はほとんど言い換えで、あまり有用な定義ではないのはもちろんである。特に、ある種の社会理論が科学的でないことを示すという第Ⅰ部の目的のためには、より厳密に科学を、もしくは理解するということを定義する必要がある。

科学とは、第Ⅰに、いくつかの具体例から、事象（初期条件）とそれによって引き起こされる事象の間の一般的にあてはまるパターン（一般法則）を見つける（帰納する）ことであり、第Ⅱにその共通パターンを使ってある事象の原因を特定すること、つまり一般法則を使って当該現象を導出（論理的に演繹）できるような初期条件（原因）を見つけることである¹。例えば、「需要と供給が一致するように価格が決まる」という一般法則を見つけ、次に、その法則と「日照不足」を組み合わせると「コメ価格の上昇」という現象が「日照不足でコメの供給が減少したためコメの価格が高騰した」と説明されるのが科学である。科学は、「心臓が停止すると人は死ぬ」という一般法則を見つけ、この法則と「A氏がB氏の心臓をナイフで突き刺して破壊した」という事実（初期条件）を結び合わせて「B氏殺人の犯人はA氏である」と殺人犯を確定する以上のことではない。科学はより組織的とはいえ殺人事件の真犯人を見つけるのと同じことであって、最初に述べたように常識的、日常的行為である。

今みた科学の定義によれば、例えば「風神が風を起こした」「勸善懲惡の神が悪事を働いた人々を罰するために災禍を起こした」「プロテスタンティズムが資本主義を興した」というのは科学であろうか。この問いに答えるために、以下では、科学的でない社会理論の例をあげながら一般法則と初期条件がどのようなものであるべきかを検討する。

¹ 新事実、例えば動植物の新種、新彗星、新しい歴史資料の示す新事実の発見は科学である。しかし、新事実の発見は以上で述べた意味での科学の資料というものであろう。第Ⅱの内容に続いて、第Ⅲに、論理的に演繹された因果関係を実証するというのが科学であるといえる。実証は本論の主張とは関連しないので、本文では言及しなかった。

第1節 単一原理

一般法則という言葉の当然の含意といえるが、一般法則は単一または、統一原理でなくてはならない。複数の原理があってはならない。もちろん現実に科学といわれるもので実際に統一原理が見つかっているということではないから、科学は統一原理・単一法則を目指すべきものであるということになる。

一般法則というのは相対的な概念で、実際的にはより一般的な、またはより抽象的な法則とより特殊な、より具体的な法則があるというべきである。先の脚注1で新技術の発見は科学ではあるが本論でいう科学の資料と述べて、新事実の発見と一般法則の間には不連続な断絶があるように述べた。しかし、これは論述を簡略化するために図式的に述べたのである。新事実の発見によって拡大する生の事実の集合から始まって、その集合の一部ごとにしか成立しないパターンを見つけ、次にはそれらのパターンの集まりが一般化・抽象化していき、最後には単一原理になるまでの抽象化を目指すというのを科学というべきであろう。したがって、一般的、または統一原理というときには、より一般的・より統一的・より抽象度の高い原理と読み替えることが出来る。

1-1 多様性

自然科学では単一原理による説明、そのための努力ということに異論はないであろう。しかし、社会科学においては、複数原理を当然として単一原理による説明、またはそれへの努力ということに原理的な反対・抵抗がある。多様な文化・多様な歴史・時代による相違を単一原理で理解しようとするのは、多様性を無視した乱暴なアプローチであると批判され、さらには単一原理の主張は人間社会についての理解が浅いためとも示唆される。しかし、自然現象も多様である。生物の形態も生態もきわめて多様である。これに対して、社会科学は結局人間という単一種の生態の研究にしかすぎない。

社会現象を研究する多くの人々は社会・人間現象の多様性を強調するが多様性はむしろ科学の当然の前提であって、生物の多様な形態、生態を4つのたん

ばく質の組み合わせという一つの原理で生物学は説明しようとするように、多様であるからこそ、統一原理で説明（抽象化）しようとする、多様に見えるものに共通性（パターン）を見いだそうとする、多様なものを一つに帰そうとする科学が存在しうる。多様性は、この節の最初に述べた科学の内容に従って単一原理が働く下での初期条件の差によるものと理解される。

人間の能力は有限であって多様性全体を知ることはできない。科学が単一原理に基づかなければならない第 1 の理由は、Hayek（1973）の言うように多様性を貫く統一原理という形で多様性を単純化・要約化・抽象化することによって初めて、有限な能力しか持たない人間が膨大で多様な森羅万象を理解することができるからである。複雑でよく理解できなかつた現象が易しくなる、つまり自分が既に慣れ親しんでよく知っている簡単な現象と同一原理によって起るということ（たとえば、りんごの落下と地球の公転は同じこと）を知るのが理解である。

1-2 複数原理による非決定性と矛盾

法則が複数あっても各法則の適用できる領域が明確で自明であれば、複数法則とは抽象度が低いというだけである。しかし、複数の原理が主張されるとき、それぞれの原理の適用領域が自明で明確なことは社会科学では普通でなく、どの原理を適応すべきかが明らかでないことがしばしば起る。このため、単一法則であるべき第 2、第 3 の理由が生れる。

単一原理を目指さなくてはならない第 2 の理由は、原理が単一だからこそ事象の原因を特定することができるからである。それぞれの法則の適用領域が不明瞭であれば、複数の法則の存在は、どの法則をとるかによって少なくとも一つの現象の原因として複数の事象を主張することになる。

唯物史観で代表される歴史段階説は、歴史を通じて成り立つ一般原則によって過去の事象を説明するのではなく、歴史の時間の流れを段階によって区分して各段階で社会・人間を動かす原理が異なる（多様）と主張する²。しかし、

日本資本主義論争のように封建制の結果としても資本制の結果としても説明できそうな重要現象が出てきてしまうことが多い。歴史段階説は政治行動の指針を得るという側面が強いのだが、どの段階に属するかという判断が異なると政治行動が違うことになる。

このため、歴史段階説は、適用する原理を決めるためにまず最初に時代区分についての非生産的な論争を延々と疲れるまで続けることになる。二つの段階のどちらでも説明できそうな時代を隣接する両段階の原則が共に働く過渡期と折衷的に考えると、今度は、なぜある現象には先行段階の法則が働き、別の現象には後続段階の法則があてはまるかを説明する統一原理が必要ということになる。18世紀・19世紀のアメリカ奴隷制などとなると、相離れた段階の法則があてはまるようにみえて折衷さえも不可能となり、歴史段階説は破綻する。

単一原理でなくてはならない第3の理由は、複数原理は互いに矛盾する可能性があるからである。ある領域にあてはまるとされる複数の法則があれば同一の初期条件から違った少なくとも二つの事象が起こることが予想される。その事象は矛盾している可能性がある。このとき、一方を排除する形でこの矛盾を克服するには複数原理を統一する原理が必要となる。例えば、儒教の影響のため日本社会は男尊女卑の社会であるといい、同時に日本では長幼の序が支配すると主張される。しかし、女性の先輩と男性の後輩とどちらが上位になるのであろうか。（上下関係はないと言うならば、日本では男尊女卑または長幼の序が支配しているという主張に反する。）もし、普通観察されるように女性の先輩が上位にあるとすれば、男尊女卑と長幼の序の優越を決定する別の原理があつて、それが統一原理であるということになる。

単一（統一）法則は、劣位にある複数法則それぞれの適用領域（具体的な条件でどの法則を使うべきか）を定めて、複数法則に伴う矛盾を解消する。

² この見方の中には、近代経済学は正しい、しかしそれは資本主義の時代にしか適用できない法則であるという理解もある。

単一（統一）法則を主張すると自然科学コンプレックスと受け取る社会理論家もいるが、法の整合性は単一法則と同じ要求である。行き当たりばったり、その時々都合に応じて法律を成立させていくと、複数の法律が相反する、矛盾する行為を要求する事態が数多く生れる。法は紛争解決・予防の手段でなく、紛争を生むことになる。このような事態を未然に防ぐには、法の整合性、つまり種々の法律を束ね、統一する法観念が必要である。

1-3 トートロジー

文化論は社会法則が文化毎に大きく異なり、社会法則に多様性が存在する（同じ事件に対して民族・文化圏によって反応法則が異なる）と強調する。しかし、文化論でいう各文化圏ごとの法則性とは、日本的、アメリカ的の後にフランス的、ドイツ的、中国的、アラブ的・・・さらに、仏教的・キリスト教的・儒教的・・・と延々と続くから法則といってもその名に値しない程に抽象度は低く、事実発見に近い。法則とされるものも高々アメリカ人は罪の文化で日本人は恥の文化³という程度の厳密性しかない。文化論は、日本人、アメリカ人・・・の行動を比べてそれぞれに目立つものを気が付くままに集めただけのものを、その文化圏の行動原理（日本的、アメリカ的・・・）と呼んでいるだけといってそう誤りではない。文化論の実質的内容は各文化圏の法則性の特定というより、文化圏ごとの事実収集である。先の脚注1で述べたように事実収集は科学であるが、本論で対象とする科学の前段階である。

「雷神が雷を起こす」等々の理論は、雷が鳴ることを雷神が起こすと言い換えただけであるからトートロジーである。目に付いた事実の列記を「日本的、アメリカ的、・・・儒教的、キリスト教的、・・・」と呼ぶものといってよい

³ 新渡部（1997）の序文にあるベルギー人法学者の疑問にみられるような、宗教なしでは道徳はあり得ないというキリスト教やイスラム教に共通する常識の延長として神が常に自分を監視していると考えるキリスト教徒のアメリカ人に対して、他人が自分を監視している、従って監視されないときもあると考える日本人は道徳性が低いというほどのベネディクト（1977）の理論。

文化論は雷神・風神論と変わらないトートロジーである。文化論は、雷神・風神論と同じように日本神、アメリカ神・・・がそうさせるというところを現代風に神を的に替えただけのことである。的の代わりに精神または魂を使って「日本精神（大和魂）、ヨーロッパ精神（ゲルマン魂）・・・が・・・の原因である」と言えば、風神・雷神論と全く変らない。

目立つことの気の付くままの収集は一面的な収集になり易い。ところが、収集したものの集合を日本的・アメリカ的等々の一般的な法則性の存在を主張、または暗示する用語で呼ぶ。この用語（によって、暗示される法則性）と矛盾する反例はかなり簡単に見付かる。例えば、終身雇用は日本の労働慣行といわれるが、日本料理の板前は庖丁一本さらしに巻いて簡単に転職する一方で、アメリカでも終身雇用はかなり広汎に認められる。R. ベネディクトは“Shame on you.”という表現を忘れていたようであり、「天罰できめん」という表現は知らなかったようでもある。収集された事実自体が相互に矛盾して、法則性に反することもある。例えば、年功序列・終身雇用は日本の労働慣行とされ、アメリカではそうではないとされる⁴。しかし、年功序列・終身雇用であれば新卒同期入社社員は全員社長になれることになる。このように直ぐ見付かる反例・矛盾は、前のパラグラフで主張したように日本的等々というのが収集した事実の集まりにつけられた名前である、つまりトートロジーであると理解することで避けられる。換言すれば、日本的等々が具体的事実から帰納される法則性を含意せず、特定の事実を記述しているだけであり、日本的等々はミスリーディングな名称であるというのが、文化論の正しい理解である。

多様性を強調する文化論は、行動原理の多様性を認めることが違った民族・文化を対等に扱い、文化的民族的差別をしないことになると主張するが、差別

⁴ この見方は、さらに年功序列は儒教的長幼の序の顛れであり、終身雇用は殿様と藩士の関係の現代化で、ともに日本の封建的伝統であるというニュアンスで、アグレベンなどには理解された。

というのは「ユダヤ人だからこうする」「黒人だからこうする」・・・といったもので、多様性を認める文化論と構造は同じである。文化論は差別をしないと決めただけであって、差別が誤っている理由を特定したものではない。これに対して単一原理による説明は、行動原理（一般法則）は誰でも同じであるが、置かれた状況（初期条件）が違うため違った様相が出現することを示す（肌の色の差は住んでいる地域の太陽光線の強さのため生じる）。つまり、差別する側も差別される側と同じ状況におかれれば、同じようにするということで、単一原理による説明は差別に根拠のないことを示す。多くの文化論は、むしろ文化に序列をつけることを暗に目的としていて、先に述べたように事実収集に偏りが多いのは文化論とは偏見の理論付けといった面が強いからと思われる。

「全知全能の神がこの世界を支配する」「すべてのことは全知全能の神の意志によるもの」という主張は、この世の出来事の単一原理による説明である。この考え方が科学でない理由は以下に続く節の課題である。

第2節 簡明な原理と初期条件

科学とは一般法則を見つけること、一般法則が初期条件に働いた結果として事象の因果関係を説明することであり、法則は複数であってはならないと前節では述べた。次に、一般法則も初期条件も簡単で明瞭なものでなくてはならない。一般法則を使って初期条件からある事象を論理的に導出するのが科学であるのに、一般法則と初期条件が簡単明瞭でなく、複雑で曖昧模糊としたものであれば、両者からの論理的演繹は不可能である。実際の問題として言えば、初期条件と一般法則が明瞭でなければ説明対象となっている好しい事象を起こし、または好しくない事象を防ぐ具体的方策をとることはできない。人間の有限な能力に収まるように複雑な森羅万象を易しく理解しようとするのが科学であるという意味でも一般法則と初期条件は簡単で明瞭なものでなくてはならない。さもないと、説明は問題をもっと難しく、理解しがたいものになってしまう。

もちろん簡単な法則やある現象を起こした簡単な初期条件を見つけるのが易しいとは限らない。

簡単明瞭でなく曖昧な原理は色々に解釈でき多義である。したがって、曖昧な原理は場合場合によって解釈を変えて事象の説明に使うことが可能である。曖昧でない簡明な原理でなければならないと言うのは、第1節の単一原理という主張とかなり重なる。

科学の反対概念は宗教である。宗教は明瞭な原理に基づいていない。「悪を罰し、善行に報いる神等々は悪者を懲らしめるために、災禍を彼らにもたらした」という主張では、説明されるべき災禍は地震・洪水等々明瞭で具体的な事象である。しかし神等々は曖昧な概念で明瞭な概念ではない。災禍を神の意志として説明するのは明瞭なものを曖昧なもので説明しようとしている。同じように、全知全能の神の支配（神はどんなことも起こしうる）というのは統一原理による説明ではあるが、神という曖昧な原理による具体的で明瞭な事実の説明である。神様のすることは推し量ることはできないという理論とある事象が起きることを論理的に導出する科学は矛盾する。実際の問題として言えば、神によって起こされたという災禍を防ぐには、神に祈るしかない。

簡単明瞭な原理の下で簡単明瞭な初期条件から導出されたものとして複雑で不思議な事象を説明するのが科学であると言うのは、あまりに当然なことと思われるかもしれない。しかしながら、第1節でみた単一原理のように、社会理論では当然のこととしては実行されていない。むしろ逆の場合も多い。以下そのような例をあげよう。

プロテスタンティズムの倫理が勤勉・儉約の資本主義精神を作り出したことによって近代資本主義が生まれたというのは、日本で大塚久雄をはじめとする多くの人々の支持を獲得したマックス・ウェーバーの有名な主張である。これは、倫理が人間行動を決めるという儒教に見られるような法則に特別な倫理であるプロテスタンティズムを初期条件として組み合わせたものである。近代資

本主義というよく分からない概念は、ウェーバーの文脈では 18 世紀後半以降のイギリスを中心として西欧で始まった経済成長と理解するだけでよいであろう。一応勤勉・儉約が経済成長をもたらすというのも法則として認めよう⁵。残ったプロテスタンティズムが儉約と勤勉を勧めるというのは科学的な主張であろうか。

儉約は貯蓄率で表わされ、勤勉は労働供給曲線の位置で表わされる一応明瞭な概念である。これに比べてプロテスタンティズムはかなり曖昧な概念である。他宗教と区別されたキリスト教とは何か、カトリックからプロテスタントを区別するものは何か、プロテスタント諸派のなかでそれぞれ他とどこが違うかは当事者たちの大きな激しい、そして決着のつかない論争であって、儀式の違い以外の差は、外部のものに理解できるようなものではない⁶。当然ながらウェーバーはプロテスタンティズムの内容を明確化しようと長々と論じているが、少なくとも私にはその内容はまったく理解できない。極めて曖昧なプロテスタンティズムによってより明確な勤勉・儉約を説明しようとしている。実際的問題として言えば、ウェーバー説が正しいとして、どのプロテスタント派に改宗すれば経済発展が最もできるのだろうか。大塚久雄の無教会派で大丈夫だろうか。プロテスタンティズムの内容が曖昧だから答えられない。

ウェーバーに想を得たのであろうと思われる、近代日本の経済発展は儒教道徳の故であり、1990 年代の日本の経済的沈滞は儒教倫理の衰えによるという森島（2004）に見られるような主張も、儒教の内容は曖昧であるから、科学的ではない。この説が正しければ儒教を振興すべきということになるが、儒教とは曖昧だから何をしてよいのかも分からない。森島先生の影を学生が踏まなけれ

⁵ 石川啄木が言うのも馬鹿馬鹿しいが「働けど働けどわが暮しよくならざりき、じっと手を見る」が普通であって、勤勉・儉約で金持ちになれば苦勞はないというのが正しいと思うが、ここでは一応措く。

⁶ キリスト教世界が相対的に力を減じて大同団結が必要と考える人々が多い現在では、キリスト教諸派は大して変らないと主張するキリスト教の人々も多いようである。

ば経済は回復しただろうか。

戦前の賃金水準が著しく低いのは日本社会が半封建的であったからという昔し広く受け入れられた講座派の主張も、賃金水準という具体的な事実を封建制という曖昧な法則（初期条件は不明）で説明しようとしているから非科学的な主張である。この主張についても半封建制の意味が不明確だから賃金を上げるために何をしたらよいか分らない。真のブルジョワ革命を起せばよいのだろうか。ではブルジョワ革命とは具体的に何だろうか。天皇制をやめることだろうか。天皇がいなくなればなぜ賃金が上るのだろうか。

日本的、アメリカ的等々であるからというよくある文化論でも、説明の対象となっているものが具体的であるのに対して、日本的等々の法則とされることの内容は極めて曖昧で多義である。ベネディクトは平和国家日本の建設のためには日本人はキリスト教に改宗すべしと言っているのだろうか。アイルランド人を多数虐殺した清教徒クロムウェルのような人が現われないだろうか。

不良債権問題で銀行が“怪しげな”不良債権原因企業に対して融資をし続けたのは企業・銀行間の従来からの親密な関係（*favoritism*）のため⁷であるというのも、融資の継続という具体的な事実を「親密な関係が故に融資をする」という曖昧な法則によって説明しようとする非科学的な主張である。このような主張をする人々は、別のところでは銀行は利潤を追求すると主張するから、複数原理によって経済を説明していることにもなり、第1節の科学の基準にも反する。

第3節 否定を意味する肯定的表現

曖昧な原理・曖昧な初期条件による説明を徹底したものに、否定的主張を肯定的表現で主張するというものがある。「Aの原因は何か」という問いに対し

⁷ このため資金が成長企業に回らないため経済が成長しないと主張された。

て「Aの原因は分からない」と言うのはもちろん答えにはならない。もう少しましな「Aの原因がBでないのはわかるが、Aの原因は分からない」というのもAの原因究明に寄与するとしても答えにはなっていない。ここで「分からない」「Bでない」というのをCと特別の名称で呼んで、「Aの原因はCである」といってももちろん答えにはならない。Cは(B以外)全てのことを含むから曖昧な概念である。ところが、Cが重々しい、または洒落れた表現であると、Cが実質のある具体性をもった概念のように誤解されて、「Aの原因はCである」というのが説明として通用する場合は社会理論では往々にしてある。

社会科学分野の例をあげる前に科学の反対である宗教には否定的主張を肯定的表現であるかのように思わせる主張が多いことをまず見たい。ある災害や不幸や不運が起きた時神または仏が起こした、例えば神が洪水を起こした、というのは、「洪水の原因は分からない」というのを神が起こしたと言い換えたものである。「神が世界を創造した」と言うのも「世界が存在する理由は分からない」というのを「神の創造」と呼んだだけである。神という言葉の重々しさ故に何か説明がされていると勘違いされているのである。もちろん、以上のことは昔からよく知られていることでI don't know. という代わりにGod knows. という。

「1980年代後半の土地価格の高騰はバブルによるものである」というのは広く受け入れられた主張である。しかしここでバブルの定義は何であろうか。バブル論者は現実の土地価格がその土地の生み出す将来収益の現在価値を上回っていると考え。しかし、何故上回っているのかは分からない。そこで、現在価値を現実価格が上回る分をバブルと名付け、「土地価格の高騰はバブルによる」と主張しているのである。「土地価格の高騰はバブルによる」という主張の本当の内容は「土地高騰の理由は分からない」ということである。バブルという曖昧ではあるが洒落た言葉を使ったため何か内容のある主張と勘違いさせるのに成功している。

前節で見た不良債権問題での親密な関係故の銀行融資の継続という見方も、言葉を言い換えることによって否定的な主張を肯定的なそれであるかのような体裁をとったという面も強い。つまり、「金儲けを目的とする銀行が不良債権原因企業に融資を続けている理由は論者には分からない」というのを、利潤動機ではない親密な関係による融資の継続という明瞭でないが、もっともらしく響く言葉で言い換えたものである。

言い換えにすぎない社会理論でよくある一つに、ある社会事象の原因は人間が非合理的であるからという主張がある。（バブルという言葉にも親密な関係という言葉にも不合理というニュアンスがある。）この主張は、「当該人間行動を論者には合理的に（あなたに納得してもらえるように）説明できない」というのを「人間は非合理的」と言い換えて「当該行動は人間が非合理的であるから起こる」と言っているのである。非合理的という言葉が情緒や感情、または義理人情と関連しているような印象を持たせるので、非合理的なためというのが内容のある説明と誤解させるのに成功している。（しかし、より明確に、情緒または感情によって行動したという説得力を失ってしまう。情を匂わすことが肝要である。）

非合理的に人間は行動するという人は、人間が常に合理的に行動するということを少なくとも自分自身には認めているのが普通だから、複数原理で人間社会を説明することになり、「不合理だから」という主張は第1節の科学の基準にも反する。

前節で見た、「日本的等々だから云々」という文化論の主張も否定的な主張を肯定的な言葉に言い換えている例とも言える。「アメリカ社会等を動かすと論者の考える原理では論者には日本で見られるある社会現象を説明できない」と正しくはいふべきところを「日本的」と言い換えているにすぎないという面も強い。

第4節 反証可能性または予見可能性

反証可能性は K.Popper によって形而上学と科学を区別する基準として主張されたものである。どんなことでも説明できる、どんなことが起きても矛盾しない理論、つまり常に正しい理論は科学ではない。起きれば、また起きなければその理論に反する事象が存在しなければその理論は科学とはいえない。換言すれば、予見能力のない理論は科学ではない。反証可能性のない理論とは、どんな初期条件の下でもどんなことでも起こることが予想される理論であるから、その理論によって何が起こるか特定できず、何が起こるかを予見することはできない理論である。反証可能性のない理論は予見能力がないから役に立たない。

反証可能でない理論の典型は再び宗教である。一神教の「全知全能の神が世界を支配している」「神はどんなことも起こせる」という認識は科学ではないと多くの人は考える。一步進んで何故このような自然・社会理解が科学でないかといえば、反証可能でないからである。全知全能の神は何でも起こすことができる存在と定義できる。何が起きても全知全能の神の存在と矛盾しない。何事も起こすことのできる、その仕業を推し量ることのできない神がこの世を支配しているという理論からこの世で何が起こるかを予見することはできない。神々のセットとしての多神教も反証可能な理論でない。風神・雷神等天候の全てに関わる神を揃えておけばどんな天気でも常に説明できる。しかし、雨が降るか、晴れるか、風が吹くかは予見できない。

前の2節で見た非科学的な社会理論は皆反証可能でない理論である。

第1節で見た多数の原理の集まりによる説明も、セットとしての多神教と同じようなもので反証可能性を満たさない。年下の男が年上の女に対して上位であるのには男尊女卑のためといい、逆の場合には長幼の序のためというように、または融資がされれば親密さ故といい、されなければ儲からないからというように、ある原理で説明不可能ならば別の原理によって説明して、生じる矛盾を

無視すれば、多数の原理を用いることによって多神教の世界のように森羅万象を説明しうる。しかし、複数あるうちどの原理を適用すべきか言えないから、ある状況で何が起きるか、たとえば融資されるか否かを予見できない。

第2節で見た曖昧な原理・初期条件による説明も反証可能性を満たさない。曖昧な原理・初期条件からはどんなことでも、相反することでも導出できる。例えば、プロテスタントの倫理が資本主義（の精神）を生んだというとき、もしあるプロテスタント一派の社会が資本主義化しなければ、プロテスタントの定義は曖昧だからそのプロテスタントは本当のプロテスタントでないといえる。非キリスト教社会の日本が資本主義化するという想定外の現象が起これば、プロテスタンティズムを、例えば石田心学を含む形で拡張解釈して、狭義のプロテスタンティズムのみならず他の勤勉儉約を推奨する宗教・道徳一般を意味することにすれば、トートロジーとなって反証可能でない理論となる⁸。

親密という言葉の曖昧さを利用すれば、融資がされているときは親密さ故といい、されないときは親密な関係がなくなったためといえば常に正しい。

R. ベネディクトの罪の文化・恥の文化理論も反証可能な理論ではない。反道徳行為を働くキリスト教徒は偽りのキリスト教徒とすれば、罪の文化論は常に正しくなる。青木（1977）は、恥の文化の日本人は非道徳的な行為に走りやすいというベネディクトの主張に反論して、誰に向かって恥を感じるかによって罪の文化の人々と同様に恥の文化の人々も道徳的であると論じている。青木の主張は正しくは、恥の文化理論も恥の解釈次第で何でも主張できる反証可能性のない理論であるということである。

文化論はトートロジーと殆んど変わらないから反証可能ではない。ある人が日本的企業は云々といったので日本の代表的企業ソニーはそうでないと私が言ったのに対して、その人はソニーは特別だからと言った。“日本的”企業でない

⁸ 日本の資本主義は本当の資本主義でないという、資本主義という概念の曖昧さを利用してとりつくり議論もあった。

日本の企業は例外として特別扱いにすれば、日本的企業論は、日本の企業についてではなく、日本的とされる経営をする日本企業についての議論だから常に正しい。しかし、任意に選んだ日本企業でどのような経営がされるかは、この理論から予見できない。

半封建的なので低賃金という講座派の主張はトートロジーにすぎない。資本主義の下での賃金水準と講座派の人々が考える水準より戦前期の賃金水準は低いと彼らは考え、一方で封建制のもとでは生活水準はより低いと彼らは考えたので、戦前期の低賃金は資本制と封建制の間、つまり半封建的であると言っただけのことである。したがって、講座派の人々の現状認識を正しいとすれば、講座派理論は反証不可能である。

第3節で見た否定的主張を肯定的主張であるかのように言い換えるのも反証可能な理論ではない。土地価格がバブルによって決まるという理論は、どんな土地価格であっても将来収益の現在価値と思われるものと現実価格の差を（マイナス値も含めて）バブルといえれば説明できる。バブル理論によっては土地価格がどのように決まるかを予見することはできない。「人間が非合理的であるから」と言うのを理論として認められれば、どんな事が起きても「人間は非合理的なため」といえば説明になることになる。もちろんこの理論から人間行動を予測することはできない。

第5節 自然への適応

今まで見てきた非科学的な社会理論では、人間社会の現象を自然的条件に対する適応として社会現象を説明しようとしなない。人間社会を自己完結的なものとして、社会現象を自然制約からは独立なものとして、自然に影響を与えても自然からの影響、フィードバックはないものとして、社会を人間の意識・思想・哲学・理念・精神・感情等々によってのみ、人間同士の関係によってのみ生じたものとして理解しようとする。つまり、このような社会理論では、自然要

因の存在しない、人間要因のみによって作られたシステムを分析するのが社会科学であるという暗黙の前提がある。どんな自然条件にある社会も奴隷制・封建制・資本制・社会主義へと進化するという歴史段階説は人間社会が自然条件とは独立に自己運動すると考えている。プロテスタントの倫理が資本主義を作り出したという理論、古代の聖賢によってアプリアリに与えられた男尊女卑や長幼の序や宗教が人間社会の在り方を決めるという考え方、ある銀行がある企業を好きだという理由で融資がされる（その結果景気が回復しない）というのも、そのような社会理論である。バブルによる土地価格の決定という見方も、非合理的行動という見方も人間独自の（と信じられる）領域が社会・経済のあり方を決定するという社会理論である。

動植物の形態・生態の差は自然環境への適応として説明される。形態・生態の差は種の差であって動植物は種を変化させて自然環境に適応していく。人間はどの動植物よりも広い範囲で、多様な自然環境で生息している。しかし、人間の間での種の差は小さい。寿命の長い人間は種ではなく生活様式（人間の生態）を変化させて自然環境に適応している。社会科学の主要な内容は、文明・社会によって異なる多様な生活様式を人間の住む多様な自然環境への適応として説明することであると私は思う。科学的な社会理論は多くの場合この条件を満たすと思う。

自然条件への対応として社会現象を理解することが常に可能と断定することはできないが、自然的技術的要因を考慮しない社会理論は疑わしいことが多い。米の伝播はそのような例の一つである。米作は日本へ朝鮮半島または山東半島経由できたというのが、小中学校の教科書にも書かれている通説である。この通説は自然的・技術的におかしい。通説が正しいとすれば、山東半島または朝鮮半島南部へは黄河下流域から、またはさらに満州を経て朝鮮半島北部から米は伝播したはずである。しかし、北に起源がある動植物は南へ、南に起源がある動植物は北へと伝播するのが自然的・技術的現象として当たり前である。東

南アジア起源とされる亜熱帯の作物である米が北から南へと伝播するのはおかしい。通説を裏付ける考古学的根拠はないようである。日本へ米が伝播したと推定される紀元前3世紀ごろには黄河下流域で米作は行われていなかった。戦前においても行われていない。むしろ米は、揚子江河口地域から台湾・沖縄・南西諸島を経て九州南部・北九州から本州および朝鮮半島南部へ伝播したと考えるのが技術的・自然的に正しいであろう。

第6節 第1部結語：政治プロパガンダとしての非科学的社会理論

第1-1項と第2節の最初でみたように科学とは難しいことを易しくすることだから、科学的説明に対する反応は「なんだ、こんなことだったのか」「簡単なことだったんだ!」「それだけのこと?」「解った後からみれば当然のことだった」といったものである。「幽霊の正体見たり枯れすすき」というのが科学である。殺人事件が解決したときのように、科学は説明対象に対する興奮を覚まし、人を平常に戻す。科学は人間を激しい政治行動・社会運動に駆り立てない。科学的社会研究は、動物行動学のようにレッセ・フェール以外の政策的含意を持たない。宗教的説明は逆である。難しく複雑なことをより難しく、より複雑にする。枯れすすきを幽霊と思わせる。対象に対して人間をより興奮させ、より怖がらせ、より憑かれた状態にする。おどろおどろしい物をもっとおどろおどろしくみせる。そして、人間を激しい政治・社会行動に駆り立てる。そのようになれば宗教として成功である。

非科学的説明は宗教と同じ構造をもっているのを見た。だから、非科学的説明は宗教と同じ効果を持つ。神学のように難しい非科学的社会理論は人間を興奮させ、激しい政治行動に駆り立てる。非科学的社会理論とは科学を偽装した政治的プロパガンダである。第1部の最初に述べたように社会科学者の一部には自然科学と社会科学は方法が違うという人がいる。そのような人は政治プロパガンダを科学と呼ぶのを正当化したいのである。それは、共産主義者が自由

・平等・平和・民主という言葉で逆の物を呼ぼうとするのと同じことであり、最近アメリカではある人々が神による創造を科学の授業で教えさせようとするのと同じことである。

ウェーバーのプロテスタンティズム理論はプロテスタント国ドイツのカトリック国フランスに対する、キリスト教ヨーロッパの中東・アジアに対する優越感と支配者となるべき使命感をドイツ国民に注入し、ドイツナショナリズムを高揚させるための政治プロパガンダであった。バブル理論や企業と銀行の特別に親密な関係による融資というのも国民を動揺させて民間企業に対する政府の強い介入を国民に納得させるためのキャンペーンであった。R. ベネディクトのアメリカに対比した日本文化論は、信心深いアメリカ国民にキリスト教ミッションとして、彼らが何も知らない日本に対する戦争を売り込むためのプロパガンダであった。第 1-3 項でみたように文化論は差別を正当化するための理論であることが多い。

60 年代の終り頃まで人気を集めた封建制という言葉がキーワードとした社会理論も科学を装った政治プロパガンダであった。その例を第 I 部の最後にあげたい。1960 年代後半には大学紛争が猖獗を極めた。それは 70 年安保闘争の入口として意図されたものであった。大学紛争が不連続的な高まりを示したきっかけは東京大学での学生ストライキであった。この学生ストライキは他大学でもあった医学部紛争に共鳴したもので、医学部学生またはインターンに対する医学部教授の封建的支配を打倒することを目的としていた。曖昧な言葉である封建制という言葉に魔法をかけられた学生はストライキに突入し、ついには軍事闘争にまでのめり込んだ。人知が進み、人々がもっと科学的に思考するようになった現在では、どの大学でも医学部問題で他学部学生がストライキに入るといふバカなことは起こらない。医学部教授が医学部学生に対して高圧的強圧的なのを見れば、現代の学生は「それは、医学部学生は医者になれば大金を手にすることができるが、その前には医学部教授に卒業させてもらわなければ

ならないからだ⁹。医学部教授は医学部学生の将来の高所得を人質にしているのだ。」と正しく考えて、冷笑し、医学部学生には勝手にやらせておけ（レッセ・フェール）と思うだけであろう。医学部における封建的支配というあいまいであるが重々しく響く非科学的理論は、40年前には枯れススキを幽霊と見せて多くの蒙昧な学生を激しい政治行動に駆り立てたのである。

II 都市

第II部の目的は、第I部で述べたような社会現象の非科学的説明・理解が一般的な通説的都市論の主要論点について科学的な説明を与えることである。第II部は第I部で述べた社会科学の方法を例示する。

都市論では第I部でいう非科学的な方法がむしろ正統的なアプローチとされる。第I部では科学は単一原理によって事象・現象を説明すると述べた。しかし、

「日本の都市のように西欧の都市と全く違った考え方に基づいてできた都市」（横（1992, p.152））「近代の東京は…城下町江戸から引き継がれた外国の都市には見られない個性的な都市の構成原理が存在し」（陣内（1992, p.401））

というように、都市論では複数原理を当然としている。

都市論では、ヨーロッパ都市と日本都市の具体的な形態上の差を曖昧で多義な哲学的・思想的・精神的相違によって説明しようともされる。都市論では目に見える都市の形象の奥にある思想・精神を見つけるということが目的とされる¹⁰。例えば、

「都市形態の背後にある深層構造というべきものをさぐり」（横（1992, p.152））、

または都市が「どのような意味論的構造をもっているかをさぐる」（横（1992, p.379））

のが都市論の目的である。鈴木博之（1999, p.10）は

⁹ このような状況を作り出すのがロースクール構想の目的であった。

¹⁰ 日本人は奥を大切にすると、横（1992）がいうのはこのことであろうか。

「都市と建築にはいったいどのような精神が込められているか」を問う。陣内（1992）では「都市を読み解く」という表現も好んで使われる。より具体的には

「町並みと建築が美しい」「ヨーロッパ都市は彼らの精神が作り上げたものであり、その精神を体現したものだ」（鈴木博之（1999, p.10））という、驚かされる事実が示そうとされる。

第Ⅱ部では、思想・哲学・精神等々の差が都市形態の差を生むという通説的都市論は、誤った事実認識にもとづいているか、事実認識が正しいときにはその事実の都市論での思想的哲学的説明は他の事実と齟齬をきたし誤っている、そして事実認識として正しいものは初歩的で簡明な技術的・経済的・軍事的説明を与えることができることを示す。都市論では

「都市づくりが集団の文化的意思の投影として理解」（槇（1992, p.176））されるのに対して、ここでは、より明確で単純な経済的利益追求・軍事的考慮の結果として都市の形態を理解する。都市論において深刻で重大な文化的・思想的問題と考えられていた現象が、幽霊の正体見たり枯尾花のようにまったくたわいのない現象にすぎないことを第Ⅱ部は示す。

日本の都市とヨーロッパの都市では成立原理（精神）が違うということを重視する都市論は第Ⅰ部で見たように科学的なアプローチではない。第Ⅱ部では第Ⅰ部の科学理論に従って、どちらの都市も全く同じ原理で作られ、両者の相違は与えられた自然条件の差によるものであること、つまり同一原理が働いているが初期条件が異なるための差であることを示す。日本都市の特徴もヨーロッパ都市の特徴も同じ原理のもとでの自然への適応であることを示す。つまりは、芦原（1990a, 第2章）で述べられている建築法・生活様式と風土の関係を、芦原のあてはめなかった都市形象についてもみる。本論と同じ技術的・経済的軍事的観点からの江戸研究で、優れた洞察を多く含んだものに鈴木理生（2000）がある。

都市論者は、多くの文化論と同様に、古代ギリシャ、古代ローマ、中世以降のイタリア、中世以降の北西ヨーロッパを一括してヨーロッパとして扱う。自然も技術も違うものを一括するには慎重でなくてはならないが、ここではこの点を問題にはしない。

以下に続く第 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12 節では、以上のことを都市の計画性・自生性、都市城壁、広場、建築材料、格子状道路、中心性・垂直性、地と図という 7 つの論点についてみる。第 13 節では都市論が、国際比較にはよくある、違うものと同じ言葉で呼ぶために生ずる混乱・錯誤の一例であることをみる。第 14 節では都市論の思考パターンの特徴を論ずる¹¹。

第 6 節 計画的都市・自然発生的都市

都市論では、ヨーロッパ都市は人為的計画的に建設されたものであるのに対し、日本の都市は自然発生的なものと考えられるのが普通である。ハイエクの用語を使えば後者は自生的秩序であり、前者は設計主義的に成立したとされる。例えば、芦原（1990a, p.48）によれば、

「わが国の都市の成立は基本的に・・・自然発生的村落の延長である。堂々と石を積み上げて城壁を作り、水道橋を建設して飲料水を・・・導き、都市の成立を宣言する西欧の都市の成立とは本質的に異なる。」

¹¹ 私はヨーロッパ都市について豊富な知見を持つわけでもなく、江戸・東京で代表される日本都市の専門家という訳でもないから、本論文には思わぬ誤りが含まれている可能性があるのを認めなければならない。しかし、私の知見と専門性のなさ故に、よく知られた事実・入手容易な文献で確かめうる事実・さらには私が批判的に論じる都市論の示す事実のみしか論拠として本論文が使えないことは、本論文の強みともいえよう。都市論を含め国際比較では、経験の浅いあなたは知らないかもしれないが、豊富な経験を持つ論者は知る何々という事実故に、あなたの疑う論者の主張が正しいと（怒りを込めて暗に）言う人がしばしばいる。本論文で見る都市論者の中にもそのような態度の窺われる人がいる。このような論法は科学的ではない。裁判官・陪審員の確認できない、知らない証拠に基づいて検事が被告は犯人であるといっても通用しないように、主張者と主張される相手とが共有できる事実と証拠によって科学的実証は行わなければならない。本論文は、容易に読者と共有できる事実を論拠に主張を展開する。

槇（1992, p.276）によれば、ヨーロッパ人または中東人にとって都市とは

「周縁に存在する荒野、あるいはカオスに対する秩序のあかし」であり、「都市は人為的な小宇宙、すなわちコスモスである。」¹²

また、槇（1992, p.264, p.265）によれば、

「日本の都市は彼ら（ヨーロッパ人、小谷による注記）のように無限の空間から抽象的空間と建築を切り取っていく（構築）作業の上に作られたものでなく、土地から生いあがったものであった。」

陣内（1992, p.179, p.196）によれば、ヨーロッパ都市では

「一步城壁の中に入ってしまうと、そこはもはや自然から遮断された人工的都市空間なのであり、人間の築いた建造物が都市美を創出している。」また、「ヨーロッパは人間の力で都市を築こうという意志が大変強い」

さらに進んで、以上の都市成立過程の差の背後には、人間（または人間の集まる都市）を自然と対立的に考えるヨーロッパ人の思想（精神・意識）と人間と自然を対立したものと考えない、人間と自然を一体（の一部）として考える、または自然から未分化の日本人の自然融和的意識との差があると、都市論ではされる¹³。例えば、

「日本の都市の特徴として、都市は自然に対する、そして農村に対する対立概念としてとらえられてこなかった」（槇（1992, p.404））そして、「形式化された自然は日本では人工的秩序を律する上位の秩序とさえ考えられた」（槇（1992, p.156））のに対して、「西欧の都市建築文化において、自然は常に人工物と対立するものとして、あるいは下位のものと考えられる場合が多い」（槇（1992, pp.155-156））。

「日本の都市はいろいろの意味で自然と共存してきた」（陣内（1992, p.199））とも述べられる。言葉をかえて同様の認識を鈴木博之（1999, p.26）は、近代建

¹² 後にもみる槇の議論のパターンであるが、槇（1992, p.347）では平気で逆のことを述べている。

¹³ このような立場から東京・江戸を懇切に論じたものに川添（1993）がある。

築と都市には場所性が欠如すべきなのに日本では「都市は」伝統に染め上げられた「場所」そのものだった」と表現する。

さらに進んで、

「われわれの祖先は微地形にひそむ場所の力、即ち土地霊の存在を感じとり、それが都市の中における場所性を豊かに醸成してきたのであるということは、まさしくわれわれは都市を形成していくにあたって、ちょうど電磁場のように、そこに展開する自然の起伏、樹木、河川、形状を通してある種の力を感じとったのに違いない。だからこそ本来人工的なものを構築する町づくりにおいても、そうした力が正しい相として現れることを願ったに違いない」（槇（1992, p.159））

と心理分析される。

以上のヨーロッパ都市と日本都市の成立の仕方についての理解は事実に反する。むしろ日本の都市の多くは計画的に建設され、ヨーロッパ都市は自然発生的であるという方が正しい。日本人自然融和説も十分な根拠を持たない。

6-1 日本都市の計画性

日本の3大都市、京都・大阪・江戸は政治権力者によって計画的に建設された¹⁴。鎌倉時代の首都の鎌倉もそうである。多くの他の都市もそうである。家康による開府以前には武蔵国国府は現在の府中市にあり、江戸は主要街道からも外れた荒蕪の地であった。よく知られているように、また鈴木理生（2000）が詳述しているように、暴れる大河の流れを大きく変え、山を崩してその土で谷と海を埋めて、さらには山を刻んで、江戸は「困縁に存在する荒野から」「切り取って構築」された都市である。また、神田上水・玉川上水を建設して「飲料水を導く」¹⁵ ことによって百万の人々を養える町にした。槇（1992, p.228）

¹⁴ 他の箇所での逆の主張にもかかわらず、陣内（1992）にもそのような認識は示されている。

¹⁵ 先に引用した芦原などでは、ローマ水道は都市住人に飲料水を供給するのを目的としたと考えられている。しかし、その供給量と飲料水需要量を考えたものだろうか。水道の規模とその建設コストに見合うものを都市は生めるのだろうか。後の第13-2項で述べることに関連して、ローマ水道の目的は主に農業用水の供給と思う。補論も参照されたい。

が「都市の為政者たちは、別に上水道を完備したり・・・しようとしなかった」と言うのは、日本の都市を論ずるものとしてあまりに常識を欠いている。古代ローマの水道橋の存在も都市論者には印象的なようであるが、江戸にもあった。その横にある橋は水道橋（バシ）と言う。江戸も京都もパレードによってそして社寺への祈願と宗教行事によって「成立を宣言」された¹⁶。

なお、槇（1992, p.173）は、東京を念頭に置いて、一方では自然発生的と言いながら他方で、明らかに計画的に作られたものであることを意味する「社会的身分による居住地の指定」と言っている。

6-2 ヨーロッパ都市の自生性

ヨーロッパの都市は、最初はローマ人の小規模軍事農業開発拠点として建設されたとしても、沈没船が漁礁となるように全体としては自然発生的に発展したと思われる。（サールマン（1983a, pp.22-27）を参照されたい。）「城壁を作り、都市の成立を宣言する」、「西欧人にとっては都市とは、扉の扉の向こう側にある閉じ込められた世界」（槇（1992, p.234））という、まず壁を作っておいてその中が次に都市として計画的に開発されたというイメージであり、都市城壁は都市が計画的に作られた傍証のように考えられているようであるが、ヨーロッパ都市では、都市城壁は何度も外側に新たに作り直された（サールマン（1983a, p.23）参照）。パリでは、シテ島を囲ったガリア＝ローマの城壁、シャルル2世による9世紀の城壁、フィリップ・オーギュストの城壁（1210年完成）、シャルル5世の城壁（1358年完成）、ルイ13世の城壁、チエールの城壁（1845年完成）と城壁は外へと建て直された（ピット（2000, p.46, p.47, p.52）、松井（1997, p.iv）参照）。陣内（1988）には、パドヴァ、フィレンツェ、ローマで壁が外へ作り直されたことが述べられている。

¹⁶ 黒坂（1941, p.190）によれば家康は江戸建設にあたって山王権現を勧進しようとした（但し、既にあった）。森田（2004, pp.63-70）によれば平安遷都に際して、朝廷は宗教儀式を数多く挙行している。

壁が外へ作り直された事实は、

「街を作っていくにあたって常にこの城壁から外に出られないという境界の存在が強く作用していた」（芦原（1990a, p.39）

というのは誤りで、松井（1997, p.2）にも述べられているように、都市は勝手に（自生的に）外へ壁を越えて発展していったことを示している。自生的発展に追いつくために新たに壁が作られた。陣内（1992, p.70）¹⁷ はヨーロッパの都市は壁に取り囲まれてコンパクトにまとめる求心的構造だから、日本と違ってスプロールが起きなかったと言っているが、実は壁の外へ外へとスプロールがヨーロッパの都市でも起き続けたのである。第 7-3 項でみるように壁はスプロール化を進める効果もあった。

芦原は村落は自然発生的と思い込んでいるようであるが、日本（おそらくヨーロッパでも、第 13-2 項参照）の多くの農村、特に武蔵野の農村は政治権力者の庇護の下で特定の人物が農地開発を行い耕作する農民を募集して計画的に作られた¹⁸。原野、森林を新たな農地として開発するには、野獣と野盗、そして原住民から身を守るために武装した組織集団の計画的な行動が必要であろう。むしろ、都市の方が交通の便といった理由で交易場として自然発生した方が多いように思われる。

6-3 自然融和説の誤り

この節の最初に引用した槇等のいうように、日本人は微地形を大切にしたり、自然の相を尊重したり、土地霊の力に動かされてきたわけではない。現代日本人のように公共事業による自然破壊・人工的な地形の形成・自然支配を当然としてきた。既述のように江戸は大公共事業によって成った都市である。自然を支配しようとした土木事業を行った例は他にいくらでもある。土地霊の問題は地鎮祭をすれば解決する。地鎮祭は地霊に安寧を祈願するのではなく、地霊を

¹⁷ 陣内（1992, p.33）の叙述はこの箇所と矛盾している。

¹⁸ 開発者の名前が地名として何々新田という風に残っている場合も多い。

脅かしつけておとなしくさせることである。電磁場のような力を感じればお祓いをすればよい。そもそも、日本では鬼神など歌で簡単に動かせるし、死後怨んで霊が雷となって出てきたら刀を振って威嚇すれば刀に雷が落ちて殺されてしまうのでなく、霊は退散してしまう¹⁹。

日本人が自然（〈場所〉がもっていた〈文脈〉）を大切にして都市を作っていく自然融和説の例として、陣内（1992, p.38）は斜面地ならそれを生かし、泉が湧く所に池をつくり大名屋敷にするという自然愛好説を述べている（大名屋敷の具体例はあげられていない）。池を持つ大名庭園全般について鈴木博之（1999, pp.125-131）は、同様の自然愛好説を展開している。この説は誤りだろう。斜面地の屋敷に池を作ったのは主に土木工事的考慮である。斜面の宅地造成地は地下水の湧水に悩まされる。特に、梅雨や台風時の大雨による大量の湧水は造成地を崩壊させてしまう。対策は水量変化に対する調整池を作ることである。鈴木博之（1999, p.130）に書かれているように、明治になって大名庭園を農地化すれば池は不必要になる。出水は灌漑用水として旧大名屋敷敷地全体に拡散すればよい²⁰。池のある庭の愛好は二次的付随的なものと考えるべき

¹⁹ 日本人は土地霊に動かされてきたから自然融和的と考えるのはタリバン的誤解である。タリバンは木や石や金属でできた仏像を拝むのは偶像崇拜だと排撃する。同じ理解を逆の角度から見れば、お寺が仏像を美術館に出してお金を稼いだり、御札をドンド焼きで燃やしてしまうのは罰あたりである。これらは誤解に基づく。簡単に言えば、仏像も御札もトータムボールである。仏像や御札自体をありがたく思って拝んでいるわけではない。仏像または御札に宿った仏性や霊（魂その他）を拝んでいる。仏性も霊も像や紙きれに招いたものである。（ちなみに、靖国神社はもともと招魂社と呼ばれた。）招く事が出来るなら立ち去ってもらうこともできる。仏性や霊に立ち去ってもらえば仏像を美術館に出しても、紙を焼いても構わない。ダイナマイトで破壊しても罰あたりではない。同じように、土地自体が霊なのではない。土地自体が霊、または土地と霊は不可分だから土地を破壊できないと思うのはタリバン的誤解である。霊が土地に棲んでいる。だから、お祓いをして土地から霊に立ち去ってもらうならばその土地の上で何でもできる。土地霊に支配されて、できることが限られる訳ではない。この脚注を書くにあたって根本誠二筑波大学教授からご教示を得た。ここに感謝を記したい。もちろん、本脚注に含まれている誤りは、存在するとすれば同氏の責任でなく、筆者の責任である。

²⁰ 鈴木博之（1999, p.130）は、池が健康上よくないと欧米医学から知ったことが池消滅の一因とも言っている。しかし、欧米医学知識輸入のセンターであった東京大学医学部のすぐ横には大名屋敷の池は維持されつづけている。上野（1998, p.106）を参照されたい。

である。

日本人が自然の結びつきを重視する例として、槇（1992, p.225）は、東京周辺に存在する円墳に木が茂っているのをあげている。そして、日本では権力者の墓がすでに自然に模されている（権力者でさえ自然融和的）と感心している。ピラミッドと対比させているのだろう。しかし、関東の権力者よりもっと強力であった権力者の葬られた近畿地方の古墳、たとえば仁徳陵は石と素焼の筒に全くおおわれていた。現在樹木に覆われているのは第 9-1 項に述べるアンコールワット等と同じ事情である。地方権力者は中央権力者をまねるのが普通だから東京の円墳、たとえば代官山にあるものもそうだろう。後の脚注 29, 第 10 節でも日本人自然融和・愛好説にもとづく都市論の誤りの別の例を述べる。第 13-1 項でもさらに日本人自然融和説について論じる。

第 7 節 都市城壁

ヨーロッパの都市には都市を囲む城壁があるのに対し、日本の都市には無い（この常識は後述のように誤り）のは都市を論ずる人にはショッキングな形象上の差であった。（中東、中央アジア、黄河流域等にも都市壁は存在する。これに関連した議論は後述する。）都市城壁は都市防衛のためという当然の理解は、なぜそんな当然のことを目的としたものが日本の都市には無いのかという、第 7-4 項でみる珍説が唱えられるほどの自然の疑問を生むだけであった。そこで、都市論では、前節でみた（そして誤りであることを示した）日本の自然発生的都市対ヨーロッパの計画的都市、または人間・都市と自然の関係についての観念の相違の顕れとして都市城壁の存否は理解された。再び引用すれば、

「わが国の都市の成立は・・・自然発生的村落の延長である。堂々と石を積み上げて城壁を作り、都市の成立を宣言する西欧の都市の成立とは本質的に異なる」（芦原（1990a, p.98））

日本では

「都市は自然に対する・・・対立概念としてとらえてこなかった」（槇（1992, p.404））が、ヨーロッパでは都市は「無限の空間から抽象的な空間を切りとって」（槇（1992, p.262））できた「人為的宇宙」であり、周囲の「カオスに対する秩序のあかし」（槇（1992, p.276））である都市は「周囲を囲堯され」（槇（1992, p.277））ねばならなかった。だから

「都市囲郭そのものがギリシア人にとって神々しいものであった・・・中心性を前提とした都市形成の文明においては領域を囲郭することが必要な行為であった。」（槇（1992, p.262））。

直接的には建物の壁について言っているようではあるが、都市城壁も含む意味で

「自然と対立して、これから画然と壁によって内部空間を作るのではなく、自然の中に融合して」（芦原（1990b, p.4））

いく意識があるから、日本の都市で壁は無い。また陣内（1992, p.156）は、ヨーロッパの

「どの都市を見ても、城壁によって周囲の農村や自然とは明確に区別され、限定された領域の中に自然を排除して石と煉瓦で人工的環境が築かれていた。」

と述べる。槇（1992, p.234）によれば

「西欧人にとっては、都市とは、扉の扉の向こう側にある閉じられた世界である。」

都市論者が慎重を期してか、くぐもった形で述べて以心伝心に分からせようとするのをあえてもう少し明確な形で言えば、ヨーロッパの都市城壁はカオスである自然から人間が切り取って秩序化した、周囲の自然とは対立する小宇宙の境界を視覚上も明示し、その事実を自己確認するためのものであり、都市人が自分たちは文明化された、自然から独立した都会人ですと他者に分らせるための道具立てであったが、都市とその周囲の自然との区別、または「都会人と農村人とが相入れない二つの人種であった」（槇（1992, p.227））ことは歴史的にない、自然融和意識の強い日本では、都市は田園と常に融合し、概念

上「田園地域と都市地域のはっきりした区別も・・・存在しない」（槇（1992, p.226））から、城壁という視覚に訴える、都市・農村を区別する道具立ては必要とは感じられなかったというのが、都市論者の見方である²¹。

もちろん、以上のような都市城壁の存在の説明は、明確な事実である都市城壁の存否を自然と都市の対立意識という曖昧な概念で説明しようとするもので、第2節でみた科学的方法に反する。

7-1 事実との齟齬

まず、京都には秀吉が築いた都市城壁があったから、日本都市に城壁はないというのは誤りである。

曖昧な概念による非科学的な説明がしばしばそうであるように、ヨーロッパ思想に壁の存在を帰す理論は多くの事実と齟齬をきたす。まず何よりも、中東・中央アジア・インド・黄河流域にも都市城壁は一般に見られることは、都市城壁の存在がヨーロッパ精神の顕れであると強調する考え方に反している²²。前項の説に従えば、ヨーロッパ文明の重要な中心の一つであろうフランスの最盛期と言えるであろうルイ 14 世の治世からナポレオン帝政の時期には、ヨーロッパ都市の代表の一つであるパリには城壁はなければならぬが、なかった。むしろ、ルイ 14 世はそれまであったパリ右岸の城壁（シャルル 5 世の壁、ルイ 13 世の壁）を 1670 年に破壊したからである。現在パリ環状道路になっている城壁跡は、7 月王政によって建設されたものである（チエールの城壁と呼ばれる）。「都市囲郭そのものがギリシア人にとって神々しい意味をもつものであった」というが、アテネには城壁はあってもスパルタにはなかった。よく言われるようにアテネがヨーロッパ文明の源流であり、壁がヨーロッパ精神の反映ならば、スパルタの壁建設をスパルタのアテネ化としてアテネは歓迎してもよいはずであるのに、『ペロポネソス戦争史』によれば、スパルタが壁を作る

²¹ この見方は刀は武士の魂というのに似ている。城壁は都会人の魂であると都市論では見る。

²² 槇はこのことを一応認めながらも、日本とヨーロッパの対立のような議論をすすめる。

うとするのをアテネは干渉し妨害した。EU はヨーロッパ・アイデンティティを重視しているように思われるが、都市城壁の再建を考える人はいない。

もちろん、既に前節でみた壁の外へのスプロールは、壁によって自然の小宇宙を壁で切り取ってその中へ文明社会を作ったとか、周囲の農村とは明確に都市が壁によって区別されたという都市論の見方と矛盾する。

7-2 人工の要害・自然の要害

壁の存否については初歩的な技術的軍事的説明ができる。ヨーロッパ・中東等で都市城壁が存在した理由は、天然の要害の少ない平原では、経済的・政治的軍事的拠点である都市を守るのに人工的な要害として壁が必要だったからである。ルイ 14 世がパリの城壁を破壊したのは超大国であるフランスにはパリ城壁は必要ない（そこまでは外国は侵攻しえない）と考えたからである（松井（1997, pp.19-20））。7 月王政によって 1845 年に壁が再建されたのは、ナポレオン戦争で簡単にパリが占領されてしまったので、祖国防衛にはパリの城壁がやはり必要と認識されたからである。1845 年に建てられたパリ城壁（チエールの壁）は普仏戦争時のパリ包囲によく堪えた。飛行機と長距離砲の出現は都市防衛の手段として城壁を無用化した。その結果城壁は壊された。パリのチエールの壁は 1919 年壊された。スパルタが壁を築こうとしたのはアテネに代って覇者となるべくアテネとの戦争を予定していたからで、当然それを知ったアテネは壁の建設を外交交渉によって阻止しようとしたのである。スパルタは壁の建設に成功し、その後戦争が起こり結局アテネは敗れた²³。

日本で都市城壁が一般的でなかったのは日本の地勢が極めて複雑で、わざわざ高いコストをかけて壁を作らなくとも都市防衛に役立つ自然の要害がいくらかもあったからである。このことは鎌倉がよく示している。現在鎌倉アルプスと呼ばれてハイキングコースとなっている山々に鎌倉は囲まれている。山々は

²³ アテネは preemptive strike をすべきであった。

鎌倉を守る城壁である。鎌倉アルプスの上を歩くと、鎌倉時代に石を敷いた遺構を見ることができる。有事には稜線上を軍兵が簡単に移動できるようになっていたことがわかる。尾根筋を切り開いたいわゆる七つの切り通しは少数の兵力でも守ることができる。切り通しを偽装して破られて敵兵を突入させた後、鎌倉アルプスを通じて送った兵によって切り通しを閉じれば、退路を断たれた敵兵は窮地に陥ってしまう。海岸線沿いの鎌倉を攻めは、新田義貞が剣を海に奉じて祈願したように潮がかなり引かないとできない。加えて、身を隠す遮蔽物のない、足をとられ進軍が遅くなる砂浜の敵兵は弓矢のよい標的である。鎌倉の地形は技術評論社（2006, p.116）を参照されたい。

江戸を北または東から攻めようとすれば右側に大きな自然の壁（現在上野から赤羽へ京浜東北線に乗ると左側に見える急斜面）が立ちほだかる（技術評論社（2006, p.44）の図を参照）。南側から東海道沿いに江戸を攻めると進入路の横にはまず高い砦として御殿山がそびえる²⁴。現在の海岸線は埋め立てによるもので江戸時代末の海岸線はほぼ現在の第一京浜沿いであるから、御殿山を過ぎると海岸線の迫る急坂の下の狭い砂浜を攻撃部隊は進まねばならない。現在の慶応大学のあたりで急斜面は海岸線から大きく離れるが、慶応大学（旧松平家藩邸）は大きな坂の上にあって自然の壁を形成している（以上については技術評論社（2006, p.111）の図を参照）。北・南・東どの方面から攻めても自然の壁を無視して前進すれば、壁上から兵が降りてきて背後を衝かれ、退路をたたれる。そこで高い自然の壁を占領するという不可能なことをしなければならぬ。西からの江戸への侵攻については、現在の外苑東通りにほぼ沿った尾根線²⁵が江戸を守る城壁として機能する。麻布山善福寺の所を出城として使えばさらによい。更に外側には現在の明治通り・不忍通りが尾根線を形成してい

²⁴ ペリー来航後大砲設置場所であるお台場建設のため御殿山は切り崩された。それ以前御殿山は現在よりもっと高かった。

²⁵ 外苑東通りは牛込柳町辺りでは谷線となる。すぐ西の河田町辺りが尾根線となる。

て、やはり城壁として機能する。

細かく書かないが、城壁もあった京都も防衛し易い町である（だから山城の国という）。京都の南は淀川沿いの狭い回廊（特に山崎の地）と大きな水域（現在は存在しない巨椋池と宇治川水系）に守られている²⁶。西と北は山に守られている。比叡山は東方からの攻撃に対して出城の役割を果たす。

鎌倉・江戸・京都は盆地の1種で、盆地であるがゆえに防衛しやすい。榎（1992, p.261）は「防衛という点からみればはなはだ不利であるのにもかかわらずあえて盆地を選んだものが多い」と述べているが、その根拠は不明である。

川も自然の防衛ラインである。日本は地中海沿岸・中東・中央アジア・黄河流域に比べてはもちろん、北西ヨーロッパと比べても多雨な国であるから、川は多く、その水量も多い。江戸に中小河川が多いのには驚かされる。しかも日本は山がちであるから、川は急流である。水量多く、急流である川が何本も走れば、都市を守るのは容易である。平家物語の宇治川の先陣争い等を参照されたい。都市城壁などわざわざ大きなコストをかけて作る必要は無い。日本での内戦は千早・赤坂城の戦いのように地勢を利用したゲリラ戦になってしまう。

ギリシャの地形は複雑なのに古代ギリシャの都市には城壁があったのではないかという反論があるかもしれない。これに対する答えは、城壁が必要なほど土地が十分に平坦か否かは、動員できる守備兵力との相対的な問題だからということである。敵の攻撃地点に守備兵がいなければ、またはそこへすぐに守備兵を回せなければ、壁を易々と敵に乗り越えられてしまうから、壁で囲っても意味がない。したがって、ピット（2000, p.38）にも述べられているように、守

²⁶ 秀吉が光秀を山崎の地で簡単に破ることができた（山崎合戦）のは不思議である。史料には残っていないようであるが、秀吉側は対岸の男山（石清水天満宮所在地）を抑えていたのではないだろうか。男山から下にいる山崎の光秀軍に鉄砲を放てば狭い山崎にいる光秀軍はとどまり得ないであろう。石清水天満宮を源氏が氏神としたのは、ここを制しておけば京都と大阪の間の通路を確保できるからではなかったであろうか。

備兵が少なく、その移動速度が遅ければ（移動速度は第 11 - 2 項で述べる物見櫓にも依存する）、城壁の内径は小さくなる。この内径より外側にある自然地形上の障害物はあっても城壁の代用にはならない。（海に囲まれたイギリスにシーザーとウィリアムは容易に陸上兵力を侵入させられたが、ドイツではできなかったのは類似の事情による。）地形が複雑であっても古代ギリシャのように人口が少なく、多くの守備兵力がないところでは、都市城壁が必要ということになる。（城壁で囲った古代アテネの領域の最大幅が 2km 程度。）次の第 7 - 3 項で述べることも古代ギリシャに城壁の存在する理由の可能性がある。

以上のように考えると、古代京都にはなぜ城壁がないかと次に問われる。その答えは、京都を囲む山々はギリシャと違って森林に覆われている上に、攻撃側が動員できる兵力が小さかったからである。京都を支配するだけの大部隊は森林の中を進めない（人間が通るだけではなく、食料・武器の補給をしなければならないことに注意されたい）。大部隊は既存道路を進まなければならないから、守備側はそこに兵力を置くだけで十分である。さらに、攻撃軍に京都を包囲できるだけの兵力がなければ、攻撃軍正面に自分を配置するだけでよく、城壁は不要である。

7 - 3 入市税

ヨーロッパに都市城壁があったもう一つの重要な理由は入市税の存在である（中央アジア・中東にもあったのではないか）。サールマン（1983a, p.23）も同趣旨のことを述べている。壁で都市を囲むことによって都市の中に物品を運び入れて販売しようとするものから税金をとることが可能になった。したがって、パリに城壁がない時代にも総徴税請負人の壁（1791 年完成）というものは存在した。画家アンリ・ルソーは税関吏とされる（たとえば『広辞苑 第 5 版』）。パリに住むルソーが税関吏というおかしな話は、日本では入市税が存在しなかったためか、英語にひっぱられたためか、フランス語 *tarif* の訳語が適切でないため、ルソーはパリ入市税の徴収を行っていた。

前の第6節で述べた都市の壁を超えた自生的膨張は入市税を脱法するのが一つの理由であったであろう。だから、都市城壁は、都市に求心的ではなく拡散的效果を与えた。入市税の確保のために為政者は壁をさらに外側に建設することを余儀なくされたのであろう。パリの総徴税請負人の壁は、ルイ14世による1670年の城壁破壊の後、入市税収確保の目的で設立がルイ16世時代に許可されて徴税請負人によって建設されたものである（ピット（2000, pp.82-83）参照）。

7-4 人道的な壁

日本の都市に城壁はなく、ヨーロッパ・中華の都市に壁があるのは、日本では町人は武士に必要な物を供給するだけの、牛馬と同じような存在としてしか認識されていなかったため、彼らの生命を防衛する必要が日本の支配階級には感じられなかったからだという珍説がある（渡辺（1985, p.58）、渡辺によれば萩生徂徠も同説）。

日本の武士階級にはヨーロッパまたは中華と違い、牛馬のごとき存在の人間が平時には必要としても戦時には必要ではない（牛馬は戦時にも必要）というのは不思議な理論である。町人は戦時には不要で、平時にのみ牛馬のように武士に必要な物を供給する存在としても、町人は重要な財産である。財産を失ってよいのだろうか。たとえば、佃島についてよく知られているように江戸町民は幕府によって招かれた人々である。せっかく招いた人々を失ってよいのであろうか。江戸町人地域は川と濠に囲まれている。町人の街アルステルダム・ヴェネチアも水によって囲まれ城壁はない。城壁を防衛手段として認めて川や濠を認めないのも不思議な軍事論である。牛馬のような人間の扱いという不明瞭な概念で都市城壁の存否という明確な具体的事実を説明しようとするのは、第2節でみたように再び科学的でない。

渡辺説は、言外に日本では武士でないものは牛馬のように扱われたのに対してヨーロッパや中華では人間として（人道的に）扱われたと言っているのであ

るが、その根拠は何であろうか。渡辺は、当然获生も文献に現れた思想によるというのであろうが、言葉だけなら共産主義の支配者は労働者農民のための政治を行っていると常に述べていた。渡辺とは逆に、敵が攻めてきたとき城壁に囲まれてない日本の都市では町民が逃げやすく、囲まれているヨーロッパや中東では敵軍の包囲時には逃げ場を失った町民は多大な苦難に会うということが予想される。普仏戦争でのパリ包囲に伴うパリ市民の生活苦は有名である。だから城壁のない都市の方が住民の安全を考えていると言えるのではないであろうか。そもそも、日本では町人は非戦闘員であったが、ヨーロッパ・中東等では戦闘員であったはずである²⁷。それならばヨーロッパ・中東では町人も城内にて当然である。この意味では日本では町人は戦時には不要であったことになる。

第8節 広場

都市論者は、ヨーロッパ都市にはある広場が日本にはないと強調する。たとえば、榎（1992, p.172）では「日本の都市には公共の広場がないという」、陣内（1992, p.214）には「日本の都市には広場がないことがしばしば指摘される」と書かれている。そのようなヨーロッパ都市の広場は「街の中心」（芦原（1990a, pp.69-85））に、そして計画的に「人間の強い意志によって作られた人工的空間」（榎（1992, p.276））であると主張される。さらには、広場は単に人々の集まるところと言うのではなく、

「広場は街の人々の住まいにおけるリビングルームの延長である」（芦原（1990a, p.34））、「イタリアの街路や広場はイタリア人にとって生活の場であり、住まいの内部と外部を均一に使うことによってその生活が成立する。」（芦原（1990a, p.68））

²⁷ 明治になって徴兵制が施行されたとき、旧武士階級は自分たちの名誉ある地位が奪われると怒った一方で、百姓町人はとんでもないことを明治政府はすると考え徴兵逃れをしようとした。これに対して、『戦争と平和』ではビョートルは自分の農奴を兵卒として率いてナポレオン戦争に赴き、『フィガロの結婚』では伯爵はケルビーニョを兵隊にしてしまう。

または

「(ヨーロッパ人にとって) 広場は・・・リアルに居間」(横(1992, p.296)), 「外を自分たちの部屋と感ずる生活感情を持っている」横(1992, p.356)とされる。リビングルームのような広場が日本にはなく、ヨーロッパにはあり、しかも計画的に街の中心に作られた理由は、芦原によれば、日本では「ウチ」「ソト」を区別する観念が強いため家の中(内部空間)と外(外部空間)を明確に区別するので家の外をリビングルームや憩いの場所にするという考えが生じえない²⁸のに対して、ヨーロッパでは両空間を同視するから外部空間にリビングルームを、つまり広場を持つということになるからである(芦原(1979, pp.3-13, pp.75-85))。

以上のような広場の理解も、前節の城壁に続いて広場の存否という明確な事実を「ウチ」「ソト」という曖昧な概念で説明しようとしている、第2節の条件に反する非科学的な見方である。

この節では次のことを示す。日本では社寺の境内が広場であった。だから、日本にも広場はあった。少なくないヨーロッパの広場は計画的にでなく、自然発生的に都市の中心にではなく、外にできた。それらは主に入市税を逃れるための手段であった。計画的に作られた広場は都市有力者の宮殿の採光をよくし、宮殿を前面の開けた気分の良い場所とするために作られた。居間としての広場というのは、狭い家にしか住めない、広い居間を持たない貧乏人が広場を居間として利用するだけのことである。

8-1 社寺の境内

広場についての都市論者の主張は、事実認識がいくつかの点で正しくない。日本に広場がないという認識は誤りである。陣内(1992, p.130)は、

「ヨーロッパ都市における教区教会のような地域のインスティテューションとしての

²⁸ この芦原のアイデアは、横(1992, p.221)に述べられているような、日本独特な倫理観という仲間とよそもの区別という見方の延長として思い付いたのであろう。

中心施設、およびそれに不可欠の広場というものは（日本には、小谷による付加）存在しなかった」

と述べているが、ヨーロッパの広場が教会の前にあることが多いのとも一致して、日本の都市に必ずある社寺の境内はヨーロッパの都市の広場と同じように機能していた。社寺の境内は子どもの遊び場であり、大きな社寺の境内は祝祭の場であり、盆踊り・見世物等の歓楽の場であり、公共的イベントの場であった。境内は、人々が私的に集い憩う居間というべきところであった。もちろん、社寺の境内は計画的に作られた人工的空間である。大きな寺社の境内はヨーロッパの広場と同様に交易の場（市場）でもあった。芦原（1990a, p.77）がいうように境内は建物で完全に四方をとり囲まれているわけではない。しかしこれによって境内を広場でないと言うのは排除するためにそう定義したのであって機能にはかかわりない。

陣内（1992, p.130）は、

「宗教空間は市民の日常生活の場所から離れ・・・市街地から奥まった丘陵や水辺・・・に登場したのである」（陣内（1992, p.130））

と社寺とそこにある境内は距離的に一般民衆から離れていたかのように陣内は示唆しているが、江戸・東京の場合神田明神・浅草寺・山王権現・芝神明宮等々の場所が市民の日常生活の場から離れた奥まった所であろうか²⁹。師橋（1995, p.19, p.21）をみると、奥まった丘陵でも水辺でもない江戸下町地帯に多くの稲荷神社があった（現在も残る）ことが分る。京都ならいくらでも平地に社寺はある。近代以前なら水辺は主要交通路（水辺と奥まった丘陵は対立概念で、両者を並列させるのは正しくない）だから、水辺に浅草寺・築地本願

²⁹ 神田明神・山王権現（日枝神社）の現在の位置は江戸幕府によって移動させられた結果である。だから、人々が奥まった高地に何らかの神聖さを感じて自然とそこが聖地として登場したと陣内の示唆するように考えるのは正しくない。むしろ、実際の活動には役立たない、大きな宗教施設を幕府は経済的価値の高い、そして日本では希少な平地から除いたというのが正しいだろう。実際の活動の障害物としての寺社の移動はその後幕府は繰り返し行っている。

寺があるのは交通の便のよい日常生活に近い所にあると理解すべきである。

榎の議論のパターンであるが、ヨーロッパの広場は日本にないといった後で平気で榎（1992, pp.277-279）は、社寺の境内（他に橋詰、辻等々も）は日本の都市での広場と認めている。この矛盾は、

「ヨーロッパで広場が作られたものであったら、日本の都市では広場とは与えられたものである」、 「ヨーロッパ的な・・・意味での広場が存在しなかったということと日本的な意味での広場が無数に存在していたというのは同じ現象に対する二つの見方にほかならない」（榎（1992, p.278））

と禅問答のようなことをいって取り繕っている。ここで言われているのは、ヨーロッパの広場は人工的であるのに対して、日本の広場である境内、すなわち寺社の所在地は自然条件から誘導されて生じた（フォーカルポイント）自然発生的・自然融和的なものという意味なのであろう。しかし、後で見るようにヨーロッパの広場には自然発生的なものも多い。一方、社寺の境内は人工的に作られたものである。日本の社寺の場所が自然条件によって誘導されたというのは、つまり自然条件が神聖さを感じさせる場所に社寺は作られたというのは、脚注 29 でみたように誤りである。社寺の場所は幕府の命によって何度も移動した。一方、カンピドーリオの丘に広場があるのは自然条件に誘導されたのだろう。教会広場は都市の中心にあると言われるが中心は自然条件に誘導されたフォーカルポイントである。何よりも、ヨーロッパの広場が日本にはないと榎等がいうとき広場の機能を持つ場所が日本の都市にはないといっていたのだから、機能は同じでも由来が違うと言うのは議論をすり変えているのであり、単に違うという結論を出したいだけのことである。

8-2 自然発生的広場

ヨーロッパの広場は街の中心に計画的に置かれたというのは正しい場合もあるが、正しくない場合も多い。モスクワの赤の広場を例に取る。ロシア語の赤は色の赤のみならず美しいという意味もあって、赤の広場は美しい広場という

意味である。共産主義の広場と言うわけではない。つまり赤の広場はロシア革命以前から存在する³⁰。赤の広場はクレムリンの壁の横にある。現在または旧ソ連時代に中央政府機能があり、帝政時代にはロマノフ家の住まいであったクレムリンは、もともとはモスクワ市内である。つまりクレムリンの壁は昔のモスクワ市を守る城壁であり、赤の広場はモスクワ市の中央ではなく外にあった。外にあるから、都市建設（というべきものがあつたとして）に際して計画的に作られたとも考えられない。現在では都市が膨張して、広場は都市の中心といえるところにある場合も多いようであるが、赤の広場と同じようにもともとは広場は壁のすぐ外に自然に発生したのことが多いと思われる。サールマン(1983a, p.25) は同じように論じている。

広場の自然発生する理由を簡単な事実によって説明しよう。もともと広場は、近辺の農産物販売のためのスペース、市場地として、公権力が意図し計画することなく、城壁の外、特に門の直ぐ外に自然発生したと思われる。前述のモスクワの赤の広場はその例である。だから、市場広場と呼ばれるものも多いのだと思われる。赤の広場も元はそう呼ばれた。人々が物品の交換のため多く集まれば、そこは情報の交換や知り合い同士の交歓の場（居間）ともなる。なぜ城壁のすぐ外に市場のための広場が発生したかといえ、前節で述べたように壁の中へ物品を持ち込むことには入市税がかかったから節税のため街のすぐ外、すなわち壁の門のすぐ外側で取引が行われたためと思われる。同じような見方

³⁰ 横は赤の広場が革命以前からあるのを知らないのではないであろうか、赤の広場は共産主義の広場という意味に理解しているのではないであろうか。横は「空間は実存的であるが故に、そこに消費し尽くされえない価値を持っている。ソビエト連邦の崩壊の日、レーニンの像があっけなく台座より引き落とされた・・・ことを人々は目撃した。しかしモスクワの赤の広場は多分今後いかなる時代も異なった意味を持ちながら存在し続けるであろうことは想像に難くない」（横（1992, p.415））と書いている。引用文中“異なった”は共産主義でないという意味で、赤を共産主義の意味に解して赤の広場はレーニン像とともに共産主義を象徴するために存在していたと横は考えているようである。ソ連の崩壊によってレーニン像が破壊されても広場は、空間が実存的であるが故に消費尽くされえない価値（共産主義以外の価値）をもつので、今後も残っていくと、横は主張しているように思われる。

はサールマン（1983a, p.25）にも記されている。都市城壁もなく、入市税が存在しなかった日本ではこのような市場、つまり広場が発達しなかった。

壁の内側に、但し城壁門を入れて直ぐの所に（だから都市中央部でなく、縁辺部に）市場としての広場が自然発生した場合も多いようである（サールマン（1983a, p.73））。中心部になかったのは細い道を通して商品を運ぶのは大変だったからであろう。入市税のかかる城門の中の理由は次項でも述べるように取引の安全性を求めてであろう。

8-3 計画的広場

槇等の言うように、ヨーロッパでは広場が街の中心に計画的に作られたと思われる場合も多くあるようである。自然的に発生したもので都市のスプロール化によって都市中心部になかったものを公権力が再開発した人工的の広場もある。しかし、それは、外部・内部空間同視のヨーロッパ人がくつろげる場所を公権力が一般公衆に提供するというためという理由で作られたのではない。芦原（1979, p.84）によれば「その芸術性のためか・・・気品に満ちている」バロック期の広場、例えばアンリ 4 世が企画したロイヤル広場が市民一般のくつろげる場所を提供するためのものと考えするには無理がある。広場が人工的に作られた第 1 の理由は、公共的イベント、例えば見せしめのための公開処刑を行なう必要があったからである。第 2 には、先に述べたような自然発生的市場をみて、入市税または市場使用税をとることを目的として市場を意図的に市当局（領主）が作った。パリのレアルはその例である（ただし、当時の市中心でなく縁辺につくられた）。前項と矛盾するようであるが、市当局は代償として商人に安全と公正取引とを保証したのでであろう。以上の理由は日本でも事情は同じで、処刑以外同じような目的で計画的に作られた社寺の境内は使われた。ヨーロッパで広場を目立つ存在とするのは第 3 の理由、採光、現代的には日照権、より一般的に言えば外に開けた開放性の快適さであろう。

8-4 採光または開放性

昔は当然ながら電気はない。室内の明かりは自然光に頼る度合いが大きかった。日本と違って地震のないヨーロッパでは建物を高くできる。しかし狭い間隔で高い建物を立てれば隣の建物によって採光が妨げられ、室内は暗くなってしまう。芦原（1990b, p.161）が言うように、大きな窓を設けられないヨーロッパの壁組工法はさらに採光を難しくする³¹。この問題を解決するには建物と建物の間隔を大きくする、つまり広場を建物と建物の間に設ければよい。大きな広場を設けるのは土地の無駄使いであるから、それは貧乏人には許されない、裕福な都市有力者のみの享受できる贅沢である。よって、貧乏人は狭い路地に面した家に住み、都市有力者の住み、活動する都市の中央には、芦原が感嘆するような有力者の住む立派な建物の間に囲まれて、広場（シニョリアー（お殿様）広場と呼ばれることも少なくない）が存在する。

以上の見方と整合的に、サールマン（1983b, p.64）によれば、1605年着工のパリにある広いロイヤル広場（現ヴォージュ広場）は上層ブルジョアや法服貴族のための上流住宅地として意図されたものに対して、1607年着工の狭いドーフィーヌ広場（パリ）は社会階層の一段下の人々のためのもので計画された。陣内（1988, p.136）はフィレンツェのパラッオ・ベッキオ前の、またはパドヴァのシニョリアー広場は建物群を取り壊して拡大された、または作られたと述べている。

陣内（1988, p.407）には一見不思議なこと（陣内自身にとっても）が述べられている。ベネチアのある島の広場では1階に商店があるが、2階以上は商店経営者でなく別の人が住居としている。陣内も指摘するように、常識的に考えれば職住一致が効率的であり、日本の商店では1階の商店経営者が2階に住む

³¹ 現代日本の木造建築で一般的に使われるようになったツーバイフォー工法は壁組工法を木造に応用したものである。ツーバイフォー工法の欠点は窓を大きくできないことであることはよく知られている。

のが普通であった。この不思議な現象が起こる理由は採光と所得分配の不平等である。よく光の入る明るい、北側であっても前面の開けて気分のいい2階以上を相対的に裕福な人々が住居とする一方、光は当たらないが、商売には都合の良い1階では貧しい人が商店を営む。彼らはより条件の悪い（光の当たらない）裏通りのなところ、したがって住居費の安い場所を住居としている。（もちろん、貧富の差が逆になっていて、大変儲る商店主は素晴らしい郊外住宅地に住んでいるということも可能性は小さいとはいえ排除できない。）豊かな町、または裕福な人々の住む地域の広場ほど大きいと思われるのも、そのような地域の人たちはもっと光を享受しようとしたであろうから、広場は採光、またはより一般的に開放性のためという見方と整合的である。

ヨーロッパの教会前広場に対応して社寺の境内があっても都市有力者の邸宅や政府施設前の広場に対応するものが日本になかったのも、採光のために広場が存在したという以上の理解と整合的である。ヨーロッパに比べて緯度が低い日本では太陽が高い上に、低層で、しかも開口部を大きくとれる軸組工法による日本の建築では採光のために有力者といえども建物前面に大きなスペースを置く必要がなかった。

いうまでもなく、採光（より一般的には前面の開けた開放性）という観点からのヨーロッパ広場の説明は、現代日本でも世界中どこでも金持ちと大企業は、前面の開けた明るいマンションに住み、またはビルに事務所を設ける一方で、貧乏人と零細企業は、建物が建て込んで陽の当たらないアパートに住み、またはビルに事務所を構えるということと同じである。広場を前にした前面の開けた気分の良い豪邸は、庭付き一戸建ての家・高層マンションの最上階ということに近い。統一原理で広場が説明される。

8-5 貧乏人のための居間

ヨーロッパ人が内部空間と外部空間を区別しないために、人々がくつろぎ、居間のように使うパブリックスペースである広場が存在するという芦原の主張

は、曖昧な概念で具体的なものを説明しようとするもので科学的とは言えない。

“居間のような広場、または道路”を簡単な事実によって説明しよう。この現象は昔の日本の下町でもよく見られた³²。イタリアの貧しい地区では広場といっても井戸のある場所(多数が同時に水仕事もできるように広がっている)というのに近いようである(芦原(1990a, p.33)参照)。そこが居間のような所というならば、日本でも井戸端会議というものもあった。居間のような広場は現在の発展途上国でも普通に見られることである。例えば、アフリカのかなり貧しい国では人々の住む小さな粗末な家を取り囲む“広場”で住人たちがくつろぎ、雑談し、遊び、飲食し、そして共同作業をしている。イタリアの広場と変わらない。一方、ヨーロッパでは人々が広場を居間にするというが、金持ち・貴族もそうであろうか、彼らはそうはしない。彼らの住居地区は芦原(1990a)の見た時代にはすでに市の外であろう。彼らの家も大きいため彼らの住宅域の人口密度は低く、人が多く集うということもありえない。富豪や貴族の集まりは大きな邸宅の中の居間で、または中庭で行われているはずである。

芦原のいう居間のような広場は庶民・貧乏人のためのものである。つまり、イタリアでも日本でもどこでも貧乏人は大きなプライベートスペース(家)を持ってないため家の外まで個人生活がはみ出し、プライベートライフが広場・境内・路地・井戸端等パブリックスペースで行われるのである。大きなプライベートスペースを持つ金持ちは屋敷の中でプライベートライフを完結できる。

ヨーロッパ上流社会外の間人である芦原はヨーロッパの下町しか訪れることができなかった一方で、日本では東京山の手屋敷町に住み、イタリア下町と変わらない東京の下町生活を知らないため、イタリアの貧乏人の都市生活と日本の金持ち都会人の生活を比べて日本とイタリアでは都市生活が違う、それ故に広場があると芦原は結論づけたのである³³。

³² 芦原(1990a)へのこのような批判に対応したのか、芦原(1990b, p.106)ではこのことを認めている。ただし、整合性については何の説明もない。

第9節 建築材料

都市論の第4の論点は伝統的建築材料の差（日本では木，ヨーロッパではレンガまたは石）についてである。木造文化と石造文化の差（陣内（1988））とも言われる。この差も城壁，広場につづいて日本精神とヨーロッパ精神の差で説明される。日本でもお墓は石で作られていることに着想を得たのか，鈴木博之（1999，p.12）³⁴は

「ヨーロッパ精神では永遠を实体として表現し，物理的にとどめるのだという意志がある」

から，ヨーロッパ人はレンガや石を材料として後の時代に残る建物をつくらせようとする主張する。一方，日本人は“はかなさ”“移ろいやすさ”を愛するから，建築が「手をかけなければ」「消えて山野に戻る」（鈴木博之（1999，p.10））のは問題とならないので，日本では木で建物が作られると（暗に）論じられる。このような永遠についての観念の差に訴える見解は都市論ではよくみかける。芦原（1990b，p.14）も

「フランス・・・ギリシャに見られる石造建築の伝統は建築の永続性を表現したものである。わが国の木造建築の伝統は常に流動し，新陳代謝する」

と同趣旨の主張をしている³⁵。槇（1992，p.226）が，日本では都市の滅亡は

「一時的であり，再建可能であり，また再建されたものは不変ではない，つまり仮の

³³ 芦原（1994）は，日本で洗濯物が外にほされているのを，景観を悪くすると罵っている。しかし，芦原のたたえるイタリア都市の下町では洗濯物を道路にほすのは当たり前である。芦原はイタリアの下町生活もよく見なかったのかもしれない。

³⁴ 私は鈴木博之（1999）の多くの主張に賛成できない。例えば，同書冒頭に「観光旅行のほとんどが都市と建築の見物」というのは，ハワイ・グランドキャニオン・カナディアンロッキー・ブーケット島・ニュージーランド等々の多くの人気観光旅行地を忘れている。イギリス旅行は，ロンドンより田舎を回る方が正統的と思う。鈴木はハイドパークをうらやましように素晴らしいというが，だらだら広がる平面的なつまらないところと思う。都市公園法でいう公園には入らない（つまり，国土交通省の所管外である）が，日本の都市の公園である白金自然教育園，浜離宮，明治神宮，糺の森等の方がずっと素晴らしい。

³⁵ なお引用に続く我が国の普請道楽についての芦原の考察は誤り。ヨーロッパ・アメリカでも同じことである。

姿であるという都市感が存在し続けた」

というのも類似した見方である。また槇（1992, p.256）は

「日本ほど・・・建物の継続性を信じない所を知らない」

とも述べている。

9-1 事実認識の誤りおよび事実との齟齬

建物を仮のものとしか見ない日本人は物理的耐久性の高いレンガ・石（以下レンガで代表）でなく物理的耐久性の低い木材を建築材料に選ぶと都市論者は理解するが、日本ではレンガを建築材料としても頻繁に起こる地震で建物は崩壊してしまう。1873年に作られた銀座のレンガ街は1923年の関東大震災で壊滅した。大金を費やして造られたレンガ街は50年しかもたなかった。むしろ、軸組工法による木造建築の方が地震に強い。日本では、レンガ・石造りの建築の方が木造より物理的永続性があるとは必ずしも言えない。だから、レンガでなく木材を建築材料としたことが、日本人は建物に永遠を実体として表現し、物理的にとどめる意図を持たない証拠にならない。西岡常一氏のように木材は建築材料として物理的耐久性が極めて大きいと考える建築家もいることにも注目されたい。

次に、建物に限らず多くのもので物理的耐用期間と経済的耐用期間を同一視するのは正しくない。この点でも建築材料の物理的耐用性は建物の永続性を決める重要な要因ではない。鈴木は、物理的耐久性のない木材によって建てられた日本の建築は時代と共に朽ちて消滅すると考えるようであるが、これは現代の廃屋についてあてはまる現代の見方である。昔の木造建築の多くは朽ちて消えて山野に戻ったのではない。木造建築は焼失するのでなければ、解体されて、別の場所に移築されるか、新しい木造建築の材料、または他の木製品の材料とされたから現存しないのである³⁶。だから、「永遠を実体に表現し、物理的に

³⁶ 『日本後記』には長岡から京都へ遷都したので長岡宮の建物は解体されたと記述されている（森田（2006, p.58）を参照）。

とどめる意思」がない、「移ろいやすさ」を愛す日本人は時代がたつと朽ちて消滅する材木を材料として使ったので過去の建築が存在しないのではない。一方，“永久的な”素材レンガを使っているのに、ローマその他の地でのコロセウムはなぜ半壊状態なのであろうか、古代ローマの多くの遺跡もなぜ残骸のみしか止めていないものが多いのであろうか、また発掘された古代ローマ都市の住宅はレンガ造りの土台のみ残って、なぜ上部の壁や天井は残っていないことが多いのであろうか。半壊等の状態にあるのに、なぜ周囲にレンガが大量に散らばって残っていないのであろうか。答えは、レンガは幼児用玩具レゴのピースのようなものでヨーロッパ壁組工法はレゴのようなものだから、日本の木造建築に使われている木材と同様に古いレンガ建て建物のレンガは新しい建物をつくるときのレンガとして再利用されたからである。1367年アビニョンからローマに帰還した教皇ウルバン5世は、新たな建築のための採石場として古代ローマの最重要遺跡フォロローマノに興味を持ったそうである (http://en.wikipedia.org/wiki/Roman_Forum 参照)。古い建物の一部をそのまま新しい建物の外壁、内壁という形で再利用される場合もあった。材料再利用は貧しい時代にはどこでも当然のことである。古い建物を壊してそのレンガを再利用する建築家は当然自分の建築についても再利用され、消滅するのが運命づけられていることを賢く予想する。だから、レンガを建築材料に使っていることから、「永遠を実体に表現し、物理的にとどめる意思」が建築者や施主にあったと推論するのは無理である。

建築が永続するのは、建築材料のためというより後の時代の人々が「手をかけて」保存するからである。1666年の大火で甚大な被害をこうむったロンドンの石造りのセント・ポール寺院は、補修後使用継続可能であったが取り壊され、新たに現在のものが造られた (http://en.wikipedia.org/wiki/St_Paul's_cathedral 参照)。旧ルーブル宮は1550年にとり壊され、新宮殿が建設され (サルマン (1983b, p.67))、パリのロマネスク寺院のほとんどすべてが16世紀末まで

にゴシック建築に変わってしまった（サルマン（1983b, p.50））。（もちろん旧建物のレンガが新建物の建設に使われただろう。）保存する意思がなければレンガ造りでも木造でも取り壊されてしまう。

レンガできたヨーロッパの建物は手をかけなくても永続することを例示するためにであろう、鈴木博之は古代遺跡が現代都市と同居した写真を示している（鈴木博之（1999, p.11））。しかし、その写真に見られる遺跡（フォロローノカ？）はイタリアの誇りとして、そして観光資源としてローマ市とイタリア政府が手をかけて大切に保存しているものである。ルネッサンス以降ヨーロッパは古代ギリシャ・ローマ文明を規範とし、その継承者であることを誇りにするようになったから、日本の木造寺院と同様に古代ギリシャ・ローマの遺跡は手をかけて保存され、例えば新しい建物のレンガとしてこれ以上再使用されないように保護されたであろう。これがギリシャ・ローマ遺跡が半壊状態の廃墟で現在に残る主な理由である。

レンガ造り・石造りでも手をかけて保存されなければ、消えて山野に戻る。アンコールワット・ボロブドゥールの遺跡は山野の中に埋もれていたものを発見されたもので、ヨーロッパの寺院のように石造りであるにもかかわらず、消えて山野に戻っていったと考えてよい。ボロブドゥール等と対照すれば、「手をかけて」保存されていないヨーロッパの建物が残骸となっても“山野に戻らない”のはレンガ造り・石造りだからではなく、寒冷少雨のヨーロッパや乾燥地の地中海沿岸では植物生産性が日本や東南アジアよりも著しく低い上に、これらの地域では一般的な羊または牛の放牧のため草または木の芽が食べられてしまい植物が繁茂しないので、建物は木々に覆われてしまうことがなかったのが理由であろう。だから、ギリシャ・ローマの古典文化復興を目指したルネッサンスとは無縁の北アフリカ等のイスラム圏にもローマ遺跡が残るのであるう。

ヨーロッパ精神を重視する鈴木の本主張に従えば一応非ヨーロッパ社会では石

やレンガの建築がなく、廃墟も残らないことになるが、紀元前のレンガ・石造りの建物は中東には多く残る。日本人が実体に残そうとしない、はかないものを評価するという鈴木説は、日本における諸行無常の仏教伝統を暗示しているのであろうが、石造り・レンガ造りのアンコールワットやボルブドゥールの遺跡は仏教寺院跡である。

レンガ造りでなく木造であることは、（仏教の影響で）日本人が永遠を実体に表現する意図がなく、日本人の精神は「仮りのもの、移ろいにゆくもの」の上になり立っていることの証明材料にはならない。レンガ造り・木造の差をヨーロッパ精神と日本精神の差と鈴木等の都市論者のようにはアイデンティファイできない。鈴木博之説の他の反例もあげておく。代表的木造建築家、西岡常一は木造建築物の永続性・継続性を信じる人である。木造建築の大仏殿は青銅造りの大仏を収納するためのものである。大仏が永続的に存在しつづけるための保護カバーは永続性がなくてよいと聖武天皇は考えたのだろうか。

9-2 自然的理由

伝統的建築材料の差は、再び簡単な技術的・自然的理由である。どこでも入手しやすい、つまりコストの安い材料を建築材料にするからである。乾燥地である地中海沿岸または中東、中央アジア、黄河流域ではそもそも木が希少である一方で、日干しレンガは作るのは容易であった。

北西ヨーロッパについては、日本の木造建築に対して石・レンガ造りというのは強過ぎる命題である。現在でも木造建築が残っている。シェーバー＝クランデル(1989, p.59)によればフランス最大の司教区であったシャルトルは1194年大半が焼失し、1666年の大火でロンドンが80%焼失したなどのように、北西ヨーロッパでレンガ造り・石造りの建物が多くなったのは16世紀以降と思われる。それ以前は古代ローマの建物と教会を除けば殆ど木造であろう。前者は偉大なローマ帝国の出先であることを威示するため、後者はキリスト教が文明国イタリアからの輸入品であることを誇示するために象徴的にレンガ・石で

作られた。それらは明治日本の銀座のレンガ街のようなもので、コストを考えずに敢えて例外的にレンガで作られたのだろう。芦原(1990a, p.39)が、石造りの城壁のできた後は内部に木造の建物は建てられず、石造りばかり建てられたと語っているのは、誤りである。ロンドンは古代ローマの石造り城壁を使いつづけたが、前述のように 1666 年にはその内部の建物の殆んどを焼失している。芦原(1990b, pp.228-231)によれば、石造りの城壁に囲まれたディンケルスビュールの町にあるドイッチェスハウスは 16 世紀の木造建築である。まさか、芦原によれば 15 世紀が最盛期であったこの町の城壁が 16 世紀後半のものではあるまい。

16 世紀以降北西ヨーロッパでもレンガ造りの建物が多くなったのは、農耕地・羊放牧地の拡大のため森が焼きはらわれ、製鉄のために大量の木炭が作られたといった理由のため森林が消滅したからであろう³⁷。また植物生産性の低いヨーロッパでは森林の再生は遅い。一方、多雨で、しばしば激しく雨が降り、しかも急斜面の多い日本では森林を消滅させることはできない。森林を消滅させれば大洪水が発生してせっかく作った耕地はすべて失われてしまう。このことは、大雨の後地すべりによって道路がしばしば不通になるという形で現代日本では起きている。日本では森林の回復は早いようである。森林ストックが維持されれば木造建築は建ちつづける。また日本で日干しレンガが可能であろうか。焼結レンガには大量の燃料が必要で、森林の問題に戻る。

鈴木博之(1999, p.13)は、精神の違いが石造りと木造の差を生むという理解の反例としてヨーロッパでも前述のように多くの木造建築が現存していると指摘されるのを予期して、同地の木造建築の木(イギリスならスカンディナヴィア、またはロシア材と思われる)は日本と違って木でも石のように堅牢である(だから同じ精神を反映している)と取り繕っている。木が堅牢か否かはそ

³⁷ このため 17 世紀以降ロシア・北欧・北アメリカから主に造船用に大量の木材が輸入された。

れを使う人の精神でなく、自然条件が決めるものであろう。堅牢なのは単に寒冷地での木の成長は遅いためであらう。

9-3 人力エネルギー

ヨーロッパのレンガ造りの建物について、私にはわからない点がある。近世ヨーロッパでは大量のレンガ造りの建物が建てられている。その集積の威容が多くの建築関係者を感銘させるのは当然ともいえる。しかし、レンガ造りの建物は人間が人力で重いレンガを積んだものである。大量の人力エネルギーが使われたことになる。大量の人力エネルギーを作り出すには、奴隷を大量に使っていた古代ギリシャ・ローマ・古代メソポタミア、または旧ソ連の収容所列島やシベリア抑留の使い捨て労働供給方式でなければ、大量の穀物または油脂を現地で必要とする。それらの食糧はどこからもたらされたのであろうか。近世ヨーロッパの農業生産が圧倒的に大きかったのであろうか。それはありえないように私には思われる。レンガ造り・木造の差を説明するのに一番重要なことは、精神の差といった曖昧なものではなく、動員できた人力エネルギーの差の原因である。前項で森林が消滅したためレンガ造りの建物が北西ヨーロッパで多くなったと述べたが、代替的なレンガ建築を可能とする大量の食糧がなければ、建築用木材供給のために森林は残されたであらう。

第6節で述べたように16世紀後半から17世紀の末まで日本では大土木工事が大量に行われた。このために大量の穀物が必要だったと思われる。大量の金銀の産出国であった当時の日本は、史料には残されていないようであるが、コメを東南アジアから金銀で大量に買っていたのではないかと想像する³⁸。同じように、新大陸での略奪によって得た金銀で食料を輸入してヨーロッパで大量のレンガ建物の建設が可能になったのかもしれない。この見方は、スペインやポルトガルそしてイタリアの大量のバロック建築については整合的である。そ

³⁸ それ故、ベトナム・タイに日本人町が発生したのだと思う。当時の輸入品とされているものからはベトナム・タイに日本人町が生まれる理由はないように思われる。

れ以外の西ヨーロッパではカリブ海で大量に生産された砂糖（または、それと交換された穀物）がレンガを積むエネルギー源になったのだろうか。

一般に都市論には国の経済力という視点が欠けている。19世紀末の日本とヨーロッパでは経済力が大きく違った。17世紀初頭でもそのように思われる。経済力の差は建築・都市の大きな様相の差、例えば費用のかかるレンガ建て対木造を生んでも当然である。日本人が石またはレンガで永遠を実体に表現したいといくら思っても、江戸時代までの日本人にできたことはせいぜい石のお墓を立てるぐらいであった。

9-4 日本とアメリカ

陣内(1992, pp.9-10)に見られるように、歴史の古い日本の都市には古い建物はなく、歴史の浅いアメリカには古い建物が残っているのをパラドキシカルに考える人も多い。本節の主題とは異なるが関連した問題なので、また日本に古い建物が残っていない理由を知りたいというのが建築材料論の一つの目的でもあるように思われるから、このパラドックスの理由を論じたい。

パラドックスは、不思議でも何でもない当然のことである。建築材料が違うせいではない。少し極端に言えば、逆説的ではあるが、日本の歴史は古いから古い建物は多く残らず、アメリカの歴史は新しいから古い建物が多く残るのが当たり前なのである。開発の新しい国というのは未開発の土地がたくさんあるということである。だから、新しい建物を建てるのに古い建物を壊して土地を開ける必要がない。よって、古い建物が残る。一方、歴史の古い国では土地はすべて開発し尽くされているため、すべての土地の上には建物が建っている。新しい技術を体化した建物、例えばインテリジェントビルディングを建てるには、古い建物を壊さなければならない。当然、古い国には古い建物は無い³⁹。

³⁹ 日本では廃棄物のリサイクル率は高い。アメリカでは埋め立てられる。アメリカには埋め立てのできる土地が多いからである。千年後には高度産業国家であった日本からは高度産業品があまり発掘されないのが不思議ということが聞かれるであろう。

特に経済成長が高ければ古い建物は急速になくなってしまう。類似の例として城壁がある。第7節で見たようにパリの城壁は撤去された。ロンドン、ウィーン等他の多くの有力都市でもそうである。しかし、小都市では壁は残っている。この相違はパリ人が古い建築物を大切にしないからではない。大都市では土地が貴重だから、不要になった城壁をそのままに放置することはできなかったのである。

日本に古い建物の残っていないもう一つの理由は、芦原（1990a, 1990b）のような都市論は伝統的な日本の建物を残そうという意図を喪失させるからである。

第10節 格子状道路

都市論者が強調する第5の点は、ヨーロッパ都市では道路は直線的で格子状（碁盤の目状）になっているのに対して日本の都市の道路は曲がりくねっている、または枝道的とされる点である。ヨーロッパ都市の道路が格子状である証拠としてはミレトスの図が示される（槇（1992, p.153）参照）。この道路パターンの差は、ヨーロッパの合理的精神や平等性のために生じたとされる。たとえば、

「格子状パターンはギリシア市民社会の平等性・・・の表示である。それは（格子状パターン、小谷による注記）はギリシャ文明の合理性の表れと理解できる」（槇（1992, p.383, p.153））、または「ギリシア市民社会の平等の精神が格子状の〈まち〉を生んだ」（槇（1992, p.346））

と主張される。日本都市では道が曲がりくねっている、または枝分か類的なのは、第6節で指摘した日本では自然と都市が対立概念ではないとされることの結果であるとも暗示される。つまり、

「枝道的な道のあり方は・・・自然界において最も普遍的に見られるが、日本の都市ではそれが自然界と全く対照的な位置にある都市に随所に表れている」（槇（1992,

p.164)) .

10-1 事実認識の誤り

日本の都市の道が曲がりくねっていて、ヨーロッパの都市の道が直線的で格子状と言うのはまったくの事実誤認である。ヨーロッパの都市の道は曲がりくねっている。榎（1992, p.151）に掲載されている18世紀ローマの地図を見れば、近代ローマ市の道は曲がりくねっていることが分かる（同図でさえ近代になって道路が直線化された結果である）。サールマン（1983a）に収録されている数多くの中世都市の地図も同じことを示している⁴⁰。古代アテネ・古代ローマ（市）の道路は格子状でなく、曲りくねっていた。第6節で見たように日本の主要都市は計画的に作られたから当然ではあるが、日本の都市の道路は伝統的に直線的であり、格子状をなしている。典型的には大阪市・京都市・名古屋市である。江戸でも、旧東京市浅草区、下谷区、神田区、京橋区、日本橋区、川向こうの本所区、深川区と道路は直線的であり、格子状をなしている。弘前、仙台、福島、鎌倉、甲府、静岡、富山、岡山、広島等々の主要都市の道路も皆直線的で格子状である。以上のことは上野（1998）に収録されている100年程前の地図を参照されたい。同書収録の地図から受ける印象は、日本では偏執狂的に格子状道路が作られてきたというものである。

榎等のいうように、東京で道路が直線的でなく、実際曲がりくねっているのは、東京では江戸時代には都会とは見なされなかった旧東京市芝区、麻布区、赤坂区、小石川区、本郷区、市谷区である。つまり、戦前に山の手と言われた地域である。少し極端に言えば、山の手ではなく山の中にある地域である。榎

⁴⁰ 以上のような批判に対して、ヨーロッパ一般ではなく、古代ギリシャ・ローマ都市について言ったのだと榎は反論するかもしれない。しかし、榎（1992）の論述では、一般の理解にしたがって古代ギリシャ・ローマはヨーロッパ文明の源流・規範として扱っているはずである。古代ギリシャといういい方をしてヨーロッパ全体について論じているという印象を与えながら、一方で本文中のような批判を受ければ古代ギリシャについて論じているのですよとかかわすつもりだったのかもしれない。この脚注に続く本文も参照されたい。

は山間部を都市部と思い、都市では道路は直線であるべきと考えているから、都市に曲がった、枝道の道路があるのが不思議に思えるのである。

山間部では直線的な道路を通すコストが高く、作っても維持するのは難しい。山間部で直線的な道路を通行するのも大変である。山の中では道路は地形に沿って作る、つまり多くの場合曲がりくねった谷線や尾根線に沿って道を作り、尾根と谷を結ぶ道は山肌に沿って曲がった枝状になった道をつくらざるを得ない。東京では、たとえば不忍通り、本郷通り、白山通り、春日通り等々皆曲がりくねっているが、尾根筋・谷筋を通る道である（技術評論社（2006, p.88）参照）。

10-2 鶴（又工）的、または似而非

都市論者は、江戸には格子状の道路と曲がった枝分れの道路がともに存在するのを認めると、江戸は鶴的または似而非的都市と考える。

陣内（1992, p.34）は、日本橋地区のような格子状道路については下町では計画的に江戸が作られたため、山の手地区の曲がりくねった道路は自然融和的に、自然相に従って、原地形に柔軟に対応して作られたためと、鶴的都市として江戸を考える。このような理解は、ある所ではある原理で説明し、別の所では別の原理で説明するという複数原理による（鶴的）説明であって科学的理解ではない（どうして下町には計画的人工的都市形成原理があてはめられ、山の手には自然融和的形成原理が当てはめられたのだろうか）。

榎（1992, pp.162-163）は、いつものパターンで日本の都市（実際は東京下町）でも格子状になっていると認めた上で、日本の都市では地域毎にしか格子状になっていず、相隣接した地域で道路が一貫して直線とはなっていないのに対して、ミレトス（で代表される西欧都市）では地域ごとではなく全体として道路が格子状になっているといて違いを指摘する。そして、この差は平等社会のギリシャに対して身分社会の日本では道路は（身分毎にまとまった）地域ごとに（「社会的に平等な立場である集団のための」）格子状パターンになる

ためと（明晰を欠く表現で）言い、江戸の格子状道路は似而非と論じている⁴¹。東京下町の地図を見ればすぐわかるように、確かに地域ごとにしか道路は格子状にはなっていない（以下で例をあげる）。しかし、この具体的で明確な事実を意味のあいまいな身分制度とか平等とかいう概念で説明しようとするのは、具体的で明確なものを曖昧な概念で説明しようとするもので第2節でみたように再び非科学的である。

東京下町で地域毎にしか道路が格子状にならない理由はやはり簡単である。再び、地形が複雑なとき大きなコストをかけない限り地形に沿う以外の道路建設は無理だからである。たとえば、東京都中央区日本橋1, 2, 3丁目・日本橋茅場町1, 2, 3丁目・八重洲1, 2丁目等で構成される地域で道路は格子状に走っている。この地域と日本橋川を挟んで隣り合う東京都中央区日本橋室町1, 2丁目・日本橋本石町1, 2, 3丁目・日本橋本町1, 2, 3丁目等の地域でも道路は格子状に走っている。しかし、両地域を通ずる道路は直線で一貫しない。具体的には、両地域の中軸道路である中央通りは、それぞれの地域では直線的に走っているが、日本橋のところで大きく折れ曲っている。槇の主張する通りである。この現象は中央通りがほぼ（江戸前島の？）尾根線を走っていて、それぞれの地域では尾根線は直線的であるが日本橋のところでこの線が急激に曲がっているからである。各地域では、尾根線（中央通り）とほぼ並行、または垂直になるように道路が作られている。槇（1992, p.163）の主張するように自由に道路の方向性が操作された結果ではない。なお、江戸時代両地域はともに富裕な商人達の町で身分層が両地域で違う訳ではない。道路が折れ曲がるのは

⁴¹ 槇（1992, p.154）では格子状でも格子の大きさは日本では身分によって違う、ミレトスで代表するヨーロッパでは、大きさは同じと指摘されている。資産・所得の差で敷地の大きさが違うのは万国共通の、当り前の経済法則である。後にみるようにミレトスと比較するのは適切でない。身分別（社会階層別）、または職業別に住居が江戸で定められたのを奇異な、前近代的制度といったニュアンスで語る人もいる。しかし、社会階層別・職業別居住は集積の利益を求めたもので普遍的に存在する。最近の有名例としてはシリコンバレーがある。計画的という面も重視するなら、つくば学園都市がある。

槇の考えるような身分制の結果というのは、この点でも誤りである。

陣内（1992, p.180）は東京都中央区日本橋本町では富士山が前に見えるように東西方向には道路を作ったという、日本人自然融和説に沿った説を紹介している。槇（1992, p.163）も同じことを言っている⁴²。この説は間違いである。富士山眺望説が正しければ、すぐ隣接する日本橋町・八重洲町の東西方向の道路も富士山を眺望するように作られない理由はないから、同所の東西方向の道路は本町の東西方向の道路と平行していなくてはならない。しかし、そうではない。

以上2パラグラフで主張したことは私が最初に発見したと思ったが、鈴木理生（2000, pp.158-160）により深い理解が示されている。富士眺望説が誤りであることを示す、同書には書かれていない点を指摘したい。富士眺望を意図された」と主張される、日本橋本町の東西方向への代表的道路の一つは日光街道へとつながる、現在の江戸通りとなっている道路である。この通りは現在の昭和通りを越えると北へと曲っていく。これは富士眺望説と矛盾する。歩くと直ぐ分るが、江戸通りはほぼ尾根線に沿っている。現在の室町三丁目交差点では主要尾根線が直交していて、日本橋本町地区ではこの二つの尾根線に平行して道はつくられている。

槇は地勢にも格子状パターンが日本では左右されたといっで一応上記の可能性にも保険をかけているのだが、ミレトスで代表されるヨーロッパでは地勢に左右されないと暗に言う。（鈴木博之（1999, p.37）もパルマ・ノヴァについて同じことを言っている。）まず、ヨーロッパ都市一般については既述のように道路はグリット状ではない。次に、ミレトスのような小さい場所とそれよりずっと大きい東京下町を比較することが適切とも思えない。ミレトスのような小さい所に地勢の大きな変化があると思えない。また、槇の示すミレトスの図

⁴² 富士眺望説はどうやって確認したのだろうか。昭和40年代には既に富士山はたとえば三越横からみえなかったと思う。

はヒポダモスの都市計画図（の模写？）であって、現存のミレトスの空中写真ではない。その通りに実行されたか確認できない計画図と現状を比べるのも適切ではない。古代ギリシャの方が江戸時代より平等な社会であったという槇の主張の根拠は全く不明であることは言うまでもない。市民は現代では普通の人であるが、ギリシャ時代には特権階級である。ミレトスは植民都市だから、その住民の平等性はあっても、偏ったサンプルとしての平等性である。

日本都市に曲がった道路があると日本人は自然を尊重するからと説明し、直線の格子状の道路の所があるとその完全でないところを見つけて、それは身分制のためという、日本都市の格子状道路を似而非とする槇の主張は、陣内と並んで道路形状を複数原理で説明し単一原理で説明しないのであって第I部で述べたように非科学的であることも指摘すべきであろう。

10-3 コスト計算

槇は、日本の都市における道路が地形相に従っているのは日本人の哲学的・思想的・宗教的特徴または自然融和観が現れたものであると第6節で述べたように考えている。槇（1992, p.159, p.169）では「土地霊の存在を感じ取り」、
「街づくりにおいてもそうした力を現れることを願った」という理解のもとで、
「自然の起伏に対応した・・・道のつけ方が好んで使われた」と論じられる。槇（1992, p.161）は「土地・自然の形状に対して細やかな配慮が強かった」から道路が技道的であったという。自然に対する畏敬の念を持っているというニュアンスを込めて道路は「微地形」に従って作られると表現されることも多い。道路が尾根線・谷線を走るのは「原地形への柔軟な対応」（陣内（1992, p.36）のためという文学的表現には思想上、または趣向の故にという含意がある。道路が自然の相に従うのは、意味の明確でない思想上、または趣味・好みの問題ではない。道路が枝分れのである、または曲がっているのは、日本人が自然に融和的だからではなく、微地形を大切にしていたからでもなく、原地形に柔軟に対応したからでもなく、自然・微地形原地形に強制されたからである。つま

り、前項で既述のように、道路の形状は初歩的なコスト計算の問題である。

道路を直線的格子状にするのは常識的発想である。格子状は地域を二次元座標で示すという便益もある。しかし、既に述べたことであるが、山あり谷ありの複雑な地形で直線的格子状道路を造る投資コストは著しく高い。従って、東京下町のような平地に近いところ、特に埋め立てられた所（大手町、丸の内、築地江東区、墨田区等）では道路は直線的で格子状になるが、東京山の手のような山岳地帯では曲がりくねった道となる。とはいえ、平地と思えるようなところでもコスト計算上やはり地形に左右されざるを得ず、日本橋地区のように地域ごとにしか格子状の道路は作れない。山がちな所で直線的道路をつくると運送コストも高くなる。榎（1992, p.153）の表現をもじって使えば、江戸の曲った枝道の道路は日本文明の合理性の表れと理解できる。

この節の最初に見たようにヨーロッパ都市の道路が、平地にもかかわらず曲がりくねっているのは、壁の外に入市税の脱法を目的として生じた都市化部分では顧客を自分のところへ導くのに有利なように商人が私道を作ったからであろう。

第 11 節 中心性と垂直性

都市論者が重視する第 6 番目は、日本都市が平板で、低層の建物がだらだらと広がっているのに対して、ヨーロッパ都市では中心部が高く、外へいくにつれて低くなっているという点である。ヨーロッパ都市には中心性と垂直性があり、日本の都市は水平的・平板的で中心性・垂直性がないといわれる。たとえば、

「わが国の建築と都市の伝統はその平面性にある」（鈴木博之（1999, pp.37-38））、
または東京は「不可解な水平都市の拡がり」（鈴木博之（1999, p.28））であるが、
「西欧においては、建物も都市も水平に展開するのではなかった」（鈴木博之（1999, p.37））

と主張される。陣内（1992, p.197）によれば

「ヨーロッパの都市がその中心に塔やドームといったシンボリックな高い建物を建て⁴³、城壁で囲んでコンパクトにまとめる求心的構造を生み出したのとは逆に、・・・（日本の都市では、小谷による注記）遠心的方法で都市を計画する傾向が強かったのである。そのことは・・・都市の発散的拡大、つまりスプロールの現象をもたらすことになった。」

「日本の建物における中心指向・垂直性の欠如」と槇（1992, p.257）は要約する。

実際、幕末時に愛宕山から撮られた江戸の写真を見ても、新宿副都心が出現する以前の東京の写真を見ても、また他の都市についても日本の都市は平板に見える。一方、ヨーロッパ都市については、15世紀ころからのイタリア絵画を見ても、中心ほど高い建物が建ち、確かに中心性と垂直性が確認される。アメリカのニューヨーク等を海の方から見ると同じように中心性と垂直性のある光景を確認できる。

建物の高さというだけではなく、都市の市庁舎・大教会といった中枢的機能が都市の中心部にあって、機能上の重要性を低下させながら都市は広がっていくという意味での中心性もヨーロッパ都市では観察されるとされる。これに対し、日本では都市は多焦点で都市の中核というべき物が中心に存在しない、モザイクを組み合わせたようだと言われる。たとえば、芦原（1990b, pp.35-38）は

「我が国の都市は・・・、中心性を欠き、アメーバのように一体性を持っているので

⁴³ 高いドームをヨーロッパの精神性思想性の反映とみるのは誤りと思う。むしろ単なる技術の問題であろう。レンガ・石を積み重ねていくヨーロッパの壁組工法で大きな建物を作ると、天井をどうやって作り、支えるかという問題が生じる。（日本の軸組工法では柱が天井を支える）。この問題の解決法は天井をアーチ型、つまりドームにすることである。アーチ型は天井を構成するレンガの重さを側壁に導く。レッツ（1989, p.21）にあるフィレンツェの花のサンタ・マリア聖堂のドームについての説明を参照されたい。

ある。これに対し、西欧の都市では教会や市庁舎が広場に面して配置され、都市の中心といったものが果物の種のように核として存在している」

と主張している。槇（1992, p.218）は、「東京は偉大な複合部落」「平たい社会」という表現をし、槇（1992, p.286）によれば、ヨーロッパあるいは中近東の

「都市は、必ずといってよいほど中心が設置されていた。中心はたんに象徴的に秩序の原点であるだけではなく、・・・行政、経済、宗教の諸行為の要であった。」

中心性の有無は再び芦原（1990b, pp.37-39）のように思想的哲学的相違として説明される。芦原の思想的哲学的考察は分かり難い物であるが、芦原の主張は、日本では個人が主張されないため

「都市空間における自己の滅却であり、個人は大きな空間の全体性の中に溶けて平均化してしまう」

から日本都市は平板な、中心性のない都市になってしまうのに対して、充実していなければならない「中心は真理の場であるという西欧の形而上学」という考え方が基本にあるヨーロッパ都市には中心性があるというものである⁴⁴。

槇（1992, p.173）も同じように「中心性の少ない社会構造は、同時に中心性に乏しい都市形態となる」と述べている⁴⁵。槇（1992, p.210）においては、

「西欧的な都市形態学は、はっきりと目に見え手で触れるものを前提にして成立している。だから・・・中心を象徴するものは、具体的なもの（尖塔、中心広場、小谷による注記）であり、それによって心動かされるものでなければならない。これに反し

⁴⁴ 日本都市には中心性がなくヨーロッパ都市にはあるというのが思想的精神的宗教的差に由来することを例示する物として、日本ではすき焼きという中心性のない物を食べ、ヨーロッパではビーフステーキという中心性がある物を食べるとロラン・バルトが論じているのを芦原（1990b, p.38）は引用している。しかし、なぜすき焼きよりもずっと伝統的な日本料理である鯛のお頭つきの焼物とヨーロッパの常識的な伝統料理であるシチューを比べないのであるか。そうすれば見方は逆転してしまう。思想性とか精神性とかいうもったいぶった議論の底の浅さがよくわかる。

⁴⁵ 槇は道路を論ずる時は伝統的日本が身分社会であることを強調していたはずである。「中心性の少ない社会構造」というのは曖昧な、よく分からない主張であるが、身分社会とは天皇や君主を中心にした中心性の強い社会ではないのか。

て（日本的、小谷による注記）奥が示唆する中心は、具体的に見えたり、手に触れるものでなくてもよい」

からであると、日本都心の中心性の欠如が哲学的に説明される。芦原と槇では、相い反することで中心性の欠如を説明しようとしていることに注意されたい。芦原は日本は中心性というものを否定すると主張するが、槇は、日本が中心性を否定するのではなく、具体的には日本では表されないと主張する。

11-1 若干の事実認識の誤り

まず日本でもヨーロッパ都市ほどではないが建物の高さで見て伝統的に中心性・垂直性の存在することを確認したい。伝統的にはどの都市でも中心には2階建て木造家屋が多く、周辺に行くと1階建てであった。明治の近代化以降鉄筋コンクリートによる建築が行われるようになると、都市中心部には3, 4, 5階建てのビルが建ち、外延部にいくほど低層になるという傾向がみられた。教会ドームが高かったように日本の寺院の屋根も高かったことも指摘すべきであろう。

11-2 経済・軍事問題としての中心性・垂直性

建物の高さで見た都市の中心性の有無は単純な経済問題である。経済学でよく知られている拡張的耕作 (extensive cultivation) と集約的耕作 (intensive cultivation) の問題の一例に過ぎない。都市人口または都市経済活動を拡大するには高層化によって活動スペースを増加するか、都市周辺部に都市域を拡張することによってスペースを増加するかの問題である。都市中心部に近いほど経済活動には有利だから都市中心部に近いほど高層化して、経済活動を大きくする。こうして中心性・垂直性が生れる。高層化・中心化の程度は、高層化のコストと移動コストにも依存する外縁部での都市活動の相対的不利さの程度を秤量することによって決まる。高層化のコストが低く、外延部の経済上の不利の程度が大きければ中心性・垂直性は高まり、都市は水平に広がらない。

伝統的に日本都市では高さの意味での中心性の程度が低かったのは、換言す

れば、日本都市は視覚的に平べったく拡散する傾向が強かったのは、思想上の差ではなく、地震の危険が全く違ったから、つまり日本では高層化のコストが高かったからであろう⁴⁶。実際、建物の耐震性の向上によって新宿副都心の高層ビル街ができた。ロスアンゼルスは日本の都市のように中心性のない、無秩序に広がる都市と見られているが、中心性のはっきりしたニューヨークが地震のない地帯であるのに対してロサンゼルスは地震地帯として知られている。欧米建築の垂直性と伝統的日本人建築の水平性の差を指摘するために、鈴木博之（1999, p.30）は『米欧回覧記』（久米（1977））を引用して、サンフランシスコの家屋が「湧くがごとく」であるのに対して、日本の「沈み込むような平屋の家並み」と対照している。しかし、日本の遣欧米特命使節の1871年にみたサンフランシスコの湧き出すような家屋は1906年の大地震によって“沈み込んで”水平化してしまった。

高さについての中心性・垂直性は、第2に第7-2項でみた都市防衛の問題も関連する。都市防衛には遠方の敵の所在・配置・戦力等々を知らなければならない。このためには物見櫓を必要とする。一般に山がちな日本では自然の高地が物見櫓となった（物見山という名の山もある）。江戸では愛宕山、御殿山、星の山（日枝神社所在地）、城山、三分坂上（現TBS）等々がその役割を果たした。二・二六事件の時には反乱軍はその本営を星の山すぐ下で外堀通りに面した所（当時、料亭「幸楽」、現プレデンシャルビル）に置いた。江戸城自体山の上に存在した。古代ローマのカピタラの丘・古代アテネのアクロポリスの丘も同じ配慮によって都市中心に選ばれたのであろう。これに対して、平坦なヨーロッパ平野部、中東では実際に建物として物見櫓を建てねばならなかった。教会の塔やミレットは、天や神への指向ということも兼ねた物見櫓であろう。方向は逆で、パリの城壁外からということになるが、ピット（2000, p.63）に

⁴⁶ 横の議論パターン従って、他の箇所との整合性を考慮することなく、横はこの事実を認めている。

よればパリを包囲したアンリ 4 世はサン・ジェルマン・デュプレ修道院の鐘塔からパリを眺めた。なお、パリではチエールの壁によってはじめてモンマルトルの丘（標高 129m）は城壁内に入った。都市論者が日本における中心性・垂直性と一応認める天守閣は近世になって軍事・政治拠点が平地に置かれるようになって建てられるようになったのも物見櫓としての中心性・垂直性という見方と整合的である。

都市論者が都市の中心性・垂直性を問題とするのは、都市を抽象彫刻としてみたとき垂直性・中心性が無いとのっぺらとして平板で、アクセントに欠け美的ではないからであろう。都市をそのような観点からみるのが適切か否かという問題を別として、日本の都市では土地自体の高低差が大きいので建物に高低差が無くともデザイン的に日本都市は退屈でない。視覚的に水平に広がったように見えない。富士山・筑波山を北斎・広重のように借景することによって高低のアクセントをつけることもできる。師橋（1995, pp.2-3）の大江戸鳥瞰図をみられたい。江戸名所絵にも土地の高低がアクセントとなることが認識されていると思う。これに対して、土地が平板なヨーロッパでは建物で高低をつけないと退屈なデザインとなる。教会の塔、ドームを印象的に描く銅版画はこの点を意識しているように私には感じられる。なお、鈴木博之（1999, p.38）が、日本の都市は「地上から眺めた場所の連なり」なのに対して西欧都市は「真上から眺め下す視点」をもったものと主張するのは大江戸鳥瞰図にも名所絵にも切絵図にも反する。

11-3 機能の中心性

機能上の中心についても事実認識が必ずしも正しくない。ヨーロッパ都市で市庁舎が町の中心にあるように、江戸の行政を担った南町・北町奉行所は現在の東京駅の南北にあった（師橋（1995, pp.6-7）参照）。京都所司代・京都町奉行所は二条城周辺にあった。主要行政機関が町の中心にあるのは、通信・交通の便から当然である。

日本都市の中心には大寺院は少ない。これは、第1に、日本に政教分離を当然とする国で、イスラム教・キリスト教国と違い、宗教組織が世俗行政組織であることはなかったから地価の高い都市中心に存在する必要がないためである。

日本では寺院が都市中心になかった今ひとつの理由は墓地である。都市を考える際の寺と墓地の重要性は鈴木理生（2000, pp.238-261）にすでに強調されている。ここでは鈴木論点（江戸の墓地＝寺は低湿地の埋め立てのためのもので、十分埋め立てられると新たな低湿地へ墓地＝寺は移された）とは別の、他の日本都市にも当てはまり、同時に中心性の問題との関連上重要と思われる点を論ずる。

実務上の便宜のため寺と墓地は併置されるのが、日本でもヨーロッパの田舎でも通例である。火葬は著しく費用がかかるため、現在日本を除けば火葬でなく土葬が一般的である。土葬は田舎では問題は生じない。しかし、人口密集地である都会では土葬は衛生上の問題を生じさせる（昔は死亡率が高かったことに注意されたい）。このため、脚注 29 で見た土地の有効利用という観点も加わって、日本では墓地とそれと対になる寺院は、郊外にあたる場所に設置された⁴⁷。神社が都市中心部にあっても寺院は江戸縁辺部にあるのはこのためである。京都でも寺院は都市中心にはない。都市の拡大とともに寺院＝墓地はさらに郊外へと移された。

一方、ヨーロッパ都市では教会と墓地が切り離された。都市中央の教会（内）に埋葬されたのは高僧と大権力者に限られた。日本の寺院と墓地のように、墓地は都市周辺部に公共墓地として置かれた。都市の拡大とともに公共墓地はさらに外へと移動させられた（ピット（2000, pp.172-173）参照）。この結果、

⁴⁷ 鈴木理生（2000, p.258）もいうように、江戸縁辺の寺院が守備陣地を意図したという陣内（1992）にも見られるような通説は誤り。鈴木があげる理由のほかに、信長・忠度のしたように、防衛拠点として使える寺院は焼いてしまうというのが、源平の争乱の昔から当たり前のことである。木造建築の寺院は守備陣地として有用ではない。

日本と違ってヨーロッパでは都市が拡大しても教会は元の場所、つまり都市中心と現在ではなっているところに留まり続けることが可能となった。

江戸時代には神社と寺は一体化していたから、神社が都市中心にあり寺（＝墓地）が都市縁辺にあったのは、ヨーロッパ都市の中心性と全く同じことが起っていたとも言えよう。

寺院にかかわる都市の中心性の問題は寺と墓地を分離するか否か問題であった。実務的な不便を忍んでもヨーロッパ都市では教会と墓地が分離されたのは、すでに述べたように、教会が物見櫓の役割を担うとともに教会が世俗行政をも担当したからであろう。

機能上の中心性については、比較が適切でないようにも思われる。中心性の議論では日本の場合に都市論者が江戸・東京を例としているのは明らかである。これに対してヨーロッパ都市については具体的な都市名は文脈から明らかでない。どこでも大都市であれば、機能上の中心性について東京と著しく相違があるようにもみえない。情報流通の速度・正確さと距離の関係から非常に集権的な、よって中心性の強い大都市は不可能だから、大都市について大きな相違のないのは当然のことであろう。ヨーロッパについては中小都市一般について考えているように思われる。実際、芦原（1990b, pp.227-231）は、壁に囲まれた領域の中心に広場があり、そこには高い市庁舎と「堂々とそびえ」立つ教会があるという型通りの中心性を持つドイツ中小都市をたたえている。その都市の最大幅は 900m 程度である。それならば、日本の中小都市、たとえば学園都市以前の茨城県桜村と普通の日本人は名を知らないようなドイツ・フランスの中小都市を比べれば機能上の中心性に差はあるだろうか。

以下のようなことは言えないであろうか。平面上に、たとえば、東西南北 10 キロごとに小都市の機能上の中心が存在する。それぞれ機能上の中心から半径 3km で都市は広がっている。間は農地、または林になっている。高さについても機能についても中心性のあるヨーロッパ都市の集まりのように見えるであろう。

う。ところが経済発展が始まり、各都市は垂直的に水平的に拡張し始める。各都市の中心機能が高まっていくと同時に、周辺農地を侵食して都市領域は広がっていく。拡張し続けると遂にはすべての都市はつながってしまう。そうすると、全体として見たとき、「多焦点の都市」「偉大な複合部落」（槇（1992, p.212））、または「モザイクを組み合わせた」（鈴木博之（1999））ような都市となる。ある一都市だけ何らかの理由で抜きんでて発展をすると、一応の中心はありながらも多焦点で、水平的にだらだらと広がった、モザイクを組み合わせたように見える。ここで町村合併を行い、地域全体を東京都と呼べばどうであろうか。陣内（1988, p.418）をみるとヴェネチアは以上のようなプロセスで出来上がったようである。つまり、機能上の中心性の有無は、定義の問題ではないであろうか。

日本の大都市がモザイクの組み合わせのようにだらだらと続いて広がっているのは、平地当りの人口密度が著しく高い日本で都市人口比率が高くなれば、日本では都市は皆つながってしまう可能性が高いためではないであろうか。また、伝統的には、von Thünen の都市経済論のように燃料供給問題が都市拡大を制約していた（薪炭供給源としての林を多く都市周辺に残さなければならない）寒冷なヨーロッパでは、経済発展による都市の拡張は高層化に比重がかかり、隣り合った町が遂に合体してしまうということがあまり起こらなかったためではないだろうか。

第 12 節 図と地

都市論者が強調する論点の 6 番目は図と地といわれるものである（芦原（1990a, pp.63-68）, 槇（1992, p.167, p.339））。図と地とは建物が道路の際まで建ち、そしてそのような建物が相接して並んで建っていることをいう、さらには、このため建物外部から見ると建物外壁が道路や広場といった公共空間の内壁のように見えて、外部空間があたかも内部空間のように感じられること

もいう。つまり、ヨーロッパでは

「建物の外壁は、建物同士がつくりだす<みち空間>とか<ひろば>にとって、まさしく内壁なのである」（槇（1992, p.156））。

これに対して日本の都市では道路際で建物が建っていない、

「建物の外郭線自体が・・・公共領域のエッジを構成するものでない場合が多い」（槇（1992, p.168））。

よって外部空間と内部空間との区別が明瞭でなく、外部空間がもう一つの内部空間を構成しているようには感じられないと主張される。言うまでもなく、このような主張を第8節でみた日本における「ウチ」「ソト」の区別という見方と両立させるのは容易でない。（この点について、さらに第12-2項を参照されたい。）

建物が道路際まで建っているヨーロッパ都市の地図では建物と公共空間を黒と白で塗り分けたものと、逆に白と黒で塗り分けたものは視覚上区別がつかないが、道路際まで建物が建っていない日本の都市の地図ではそのようには見えないとされる。槇（1992, p.288）は日本の都市では「白地と黒字の間にグレー・ゾーンというべき中間的な外部空間が多く存在する」という⁴⁸。建物際と道路際が一致していると、建物・道路を白・黒に塗り分けたものとその逆転図の区別がつかないことは地と図と表現される。

地と図の有無の証明として、芦原（1990a, p.65, 図12, 図13）が挙げられている。しかし、図13のような江戸切絵図には、ローマの図12とは違い、建物は表示されず、地所区分だけしか示されないから、図13から建物と道路の関係は分からないことを指摘したい。また図13は江戸赤坂であって、江戸時代の都市部ではない。

⁴⁸ 一方で「自分の領域と他人の領域に関するはっきりした区別する精神があった」（槇（1992, p.339））と矛盾したことをいつものようにいう。

12-1 事実認識の誤り

都市論者の図と地についての議論は、自生性・広場・道路に続いて事実認識で誤っている。現在もそうであるように、昔から東京下町では建物は相接して道路際まで建っていた。京都でも道路際まで建物が相接して建っていた。栃木市・川越または櫃原市今井町等の町並みを見ても伝統的に都市では道路際まで相接して建物が日本でも建っていたことがわかる。広重等の浮世絵や江戸末の写真を見ても道路際まで家が相接して建っていることがわかる。矢田（1975）に掲載された多くの写真を参照されたい。堀（1996, p.13, p.23, p.34 等々）も参照されたい。芦原（1990a, p.58）は、日本では道路際まで建物がたっていないと論じた後で、例外的というニュアンスで京都の町屋と馬籠では建物は道路際まで建っていたと述べている。京都を日本都市の例外とするのはあまりにも無茶であり、馬籠も典型的な中小都市と言えるであろう。

陣内（1992, pp.73-75）などは大名屋敷・旗本屋敷では道路際には塀・門しかないというが、陣内（1992, p.56）自身が書いているようにそれは長屋門である。長屋門とは文字どおり、下級武士の住む長屋を兼ねた門である。陣内（1992, p.54）掲載の黒田家屋敷の長屋門を参照されたい。堀（1996, p.9, p.10）も参照されたい。塀も長屋だった場合が多いようである。だから、ルーブル宮やメディチ館のように大名屋敷でも道路際まで人間の住む建物が建っていたと言える。

陣内（1992, p.43）は地と図の主張として「街路に沿って建物が壁を共有しながら連なるヨーロッパ都市では、敷地＝建物という性格が強く、敷地全体を建築化しようとする傾向が強い」と言っているが、誤りである。現在ではそうではないが伝統的なヨーロッパ都市の建物では必ず、敷地の大きな部分を中庭が占めていて、敷地＝建物ではない⁴⁹。日本でも中庭は普通であった。明りと通風のために昔の建物は中庭がどこでも必要であった。

日本で道路際まで建物が建たず道路際には塀があり、奥のひっこんだところ

に建物があるのは比較的裕福な人々の住む郊外の住宅地である。芦原等は、第 8 節の広場、第 10 節の道路につづき東京等日本都市の郊外を都市部と勘違いしてヨーロッパの都市中心部と比較して都市形態が違っていると論じているのである。

「西欧の都市における一元的ハードな境界に比べて、日本の境界ははるかに曖昧であり、ソフトである」（槇（1992, p.170））というが、このことが当てはまるのは日本の住宅地であって、都市中心部ではない。西欧でも住宅地なら同じことがいえる。陣内（1992, p.55）は、

「ヨーロッパなら田園の中の別荘建築か、あるいは近代の郊外住宅にしか登場しないような庭付き独立住宅が日本では都市の中心部にも広範に形成された」

というが、この箇所陣内が都市中心部と言っているのは東京都千代田区麹町や同港区三田のことである。昭和の初めの頃までなら麹町や三田は郊外である。

道路際まで建物が日本では建つか否かという図と地の議論に関連して、芦原（1990b, p.25）や鈴木博之（1999, p.31）は、ヨーロッパでは外部に自己を主張する建物正面の表情（ファサード）を重視するが、日本ではしないと述べている。陣内（1992, pp.53-54）では認識されているが、これも事実誤認である。東京国立博物館にある池田家大手門や川越・栃木等に残る商家、昭和 30 年代から目立ちはじめた伝統的商家をコンクリート造りのように正面からは見えさせる装飾などを見れば、日本でもファサードを重視したことがわかる。

12-2 非科学的説明

道路際まで建物が建つか否かというのは思想的哲学的な背景に由来すると芦原や槇は主張している（芦原によれば日本では「ウチ」「ソト」を区別する意識が強いので外部空間は内部空間のようにならない、槇によれば奥を日本人は

⁴⁹ 中庭も建物の一部というならば、日本の屋敷構えの前庭はなぜ建物の一部として考えないのだろうかということになる。日本では建築者・施主は建物と一体として庭を考えていたはずである。前述のように屋敷構えで塀とされるものは住居建物であったから、前庭ではなく、中庭であったともいえる。それならば、日本でも建物＝敷地である。

大切にするので道路から引込めて奥に建物を建てる)。このような主張は、再び、曖昧な概念で明瞭で具体的な事実を説明しようとする非科学的なアプローチである。

「ウチ」「ソト」の意識上の区別・無区別は、全く逆の都市形態とも整合的である。つまり、「ウチ」「ソト」を区別する意識が強いならば、日本人は道路際まで建物を建て、区別のないヨーロッパ人は建物と道路の間にあいまいな空間を残してもよさそうである。「ウチ」「ソト」区別意識という曖昧な概念からは、このように全く正反対のことを導出することができる。だから、観察される現象の説明になっていない。「ウチ」「ソト」の区別意識は、第 I 部でみた何でも説明できる理論であって神の支配論のように科学的ではない。

上でみたように「ウチ」「ソト」区別論は「地と図」論の逆も主張できるから、槇 (1992, p.414) は、日本では建物が道路際まで建っていないのは日本人にプライベートとパブリックの区別が曖昧であるためであるとも⁵⁰いって、芦原 (1990a) の「ウチ」「ソト」区別論と逆の原理によって図と地を説明しようとしている。ある現象が、A によっても非 A によっても説明できるとしたら、A による説明も非 A による説明も説明とはいえない。

なお、槇が日本的と強調する奥にものを置くというのは、洋の東西にかかわらず使われる、物をもっともらしくみせるためのよくある演出であり、特に日本の独創ではない。たとえば、祭壇は教会の奥にある。パリのオペラ座は道路の奥にある。

12-3 初歩的経済問題

道路際まで建物が建っているか否かの問題は再び初歩的な経済問題である。

⁵⁰ 最近日本の都市建築では建築家と都市計画当局は民有地の一部をパブリックスペースとして開放することを要求している。この結果、民有地の一部にしか建物は建たず、周囲は自由に人が入れる。これは、日本人建築家・都市計画家にパブリックとプライベートの区別がないからだろうか、また、グレイゾーンを槇の言うように好むからだろうか。

土地価格の高い都市中心部では道路ぎりぎりまで建物が建つ。中心部を外れて土地価格が安くなればゆつたりと敷地内に建物は建てられる。だから、第 12-1 項で既述のように日本でもヨーロッパでも同じことが観察される。ルーブル宮殿・メディチ宮殿のように都市部では日本でも建物は確かに道路際まで建っているが、郊外にあればヴェルサイユ宮殿・ピッティ宮殿のように道路際から離れて敷地の中に建物は建てられる。馬籠は都市中心部でないかもしれないが、疲れた徒歩旅行者を自分の旅館に導くには建物は道路すぐ横に建てられねばならない。

現代日本の日照権問題と同じことであるが、室内照明のよくなる 19 世紀中ごろ以前には、第 8-4 項で見た広場と同じく採光ということも道路際に建物が建てられた理由と思われる。建物間にある程度のスペースがないと建物内部は明るくならない。南側道路の場合には、道路の間際に建物を立てても十分な採光を得ることができる一方で、そうすることによって、中庭をはさんで敷地内のもう一つ北側にある建物の採光をよくできる。北側道路の場合、道路に一番近い建物は道路際に建てると、他の建物の位置を一定とすれば採光が一番よくなる。つまり、北側道路、南側道路いっばいに建物を建てることによって内庭を大きくすることができ、内庭に面した部屋の採光と通気を改善できる。東側、西側道路の場合でも程度はより低いであろうが同じことがいえる。この場合も前面の開けた気分の良さは建物を道路際に建てることによって最大化できる。郊外ではゆつたりとした大きな敷地を得ることができるので、採光、気分の良さのために建築を道路際ぎりぎりに建てる必要もない。

第 13 節 定義の問題：自然と都市

国際比較では、違ったものを同じ言葉で呼ぶために生じた混乱または錯誤がしばしばみられる⁵¹。つまり、言葉の定義の問題にすぎないことを深刻に論じていることが多い。通説的都市論でも、この分野での基本的な用語である自然

と都市という言葉は日本とヨーロッパで違うものと呼ぶのに使っている。今まで見た都市論の多くの事実認識の誤りは結局の所このために生じている。

13-1 自然の強弱

都市論者がヨーロッパでは人間（都市）は自然と対立し、日本では自然と融合、または調和しといった趣旨の第6節のような議論をするとき、自然という言葉に私は違和感を覚える。自然というのが、日本の自然とヨーロッパ、特に地中海沿岸の自然とは全く違う。違う自然を一つの言葉「自然」で呼んでいる。人間行動に弱い制約しか課さないほどヨーロッパの自然の力は弱く、日本の自然は強く、人間行動に強い制約を課す。強い、弱いという言葉がおかしければ、違う自然は違う制約を人間に課す。

自然とはあいまいで抽象的な言葉であるから、具体例として植物生産性を考えよう。植物生産性は温暖多雨な日本では大きく、寒冷小雨、または乾燥した北西ヨーロッパ・地中海地方では小さい。日本人が自然にどんな観念を持っていようと、少なくとも江戸時代末までは仙台より西では大きな植物生産性に対抗するだけの経済力・技術力を日本人は持っていなかった。日本の都市は、大きい植物生産性を受け入れざるを得なかった。好きでも好きでなくても、都市に大きな緑が繁茂するのを日本では甘受せざるを得なかった。植物生産性の小さいヨーロッパでは、人間が植物の成長を抑えようと思えば19世紀中ごろでも抑えることができた。都市論者は道路が舗装され、広場に石が敷き詰められて一木一草なく土が見えなくなっているのをヨーロッパにおける自然と都市の対立の象徴的事例としてあげる（陣内（1992, p.196）参照）。しかし、日本でそんなことをすればどうなるであろうか。すぐに雑草が繁茂して、数年で舗装に使われた石はひっくり返されてしまい、石の多数散らばる、通行しにくい地面になってしまう。さらに、道路を完全に舗装することに成功すれば土が雨を

⁵¹ 最近の有名な例としては、橋木氏の日本の所得不平等が国際的にみて非常に高いという指摘がある。詳しくは大竹（2005）を参照されたい。

吸い込まなくなるため、雨量の圧倒的に多い日本では現在起きているように雨が降ると洪水がしばしば都市で起きることになってしまう。第9節でみたように建築材料の差は、植物生産性の差から生まれた。

地形も自然の具体例である。日本の地形は複雑で、少しの距離の間で急激に変化する（江戸は坂の多い町である）から都市や建物をつくるのに日本では地形に大きく制約されるが、地形がより単調であるヨーロッパ平原や地中海地帯ではされない。槇（1992, p.159）は、日本人は自然の相に従い、ヨーロッパ人は従わないというが、ヨーロッパ平原はもちろん地中海沿岸でも地形が日本の都市部に比べ単調で従うべき相がない。または、平面という相に従っている。

我々は自然というとき無意識に日本的自然（例えば、強い植物生産性）を想定する。だから、日本的自然の制約下でないヨーロッパ都市は自然一般と対立し征服した、または自然一般から独立している、場所性がないと勘違いする。槇（1992, p.156）は「日本の都市のなかで自然の占める重要性はほとんど恒常的に存在し」といっているが、ここでいう自然とは日本的自然で、その重要性が日本には恒常的に存在し、ヨーロッパには存在しないのは当然である。逆に、ヨーロッパ的自然の重要性は、都市城壁、広場、垂直性の存在、レンガ造りにみられるようにヨーロッパ都市には恒常的に存在したが、日本では存在しなかった。自然に対する考え方が同じであっても、自然を日本的自然と理解すれば日本は自然に妥協しているように、ヨーロッパでは人間が自然に打ち勝っているように見える。

「どこにでも均質空間を作り出す近代都市（つまり、ヨーロッパ都市、小谷による注記）とは逆に」（陣内（1992, p.37））「日本の都市空間は自然や地形との密接な関係のなかで組み立てられた」（同）

というのではなく、ヨーロッパの自然地形は単調で均質だから、そこに作られた都市は均質な空間となり自然とは無関係にみえ、地形が複雑で均質ではない日本に作られた都市は自然地形の変化とともに都市空間は変化せざるを得ず、

均質にはならない。日本の都市空間が日本の自然や地形との密接な関係のなかで組み立てられたように、ヨーロッパの都市空間はヨーロッパ的自然や地形との密接な関係のなかで組み立てられた。自然と対立するヨーロッパ人、自然と融和する日本人という、都市論者の見方は、自然条件の差を思想的相違と勘違いしたのである。

我々の慣れ親しんだのでない自然は不自然に、そして人工的にさえ見える。南蛮人の従僕として連れて来られたアフリカ人を見た信長は、肌の黒いのは墨を塗っているから（人工的）と疑い、体を洗えと命じたというが、ヨーロッパ都市を自然と対立的、人工的という都市論は同じことである。

13-2 都市の定義

都市論者の論点に共通するもう一つの問題上の混乱は、日本とヨーロッパで違うものを同じ言葉、都市で呼んでいることである。具体的には、都市論は日本のみならず他の社会にも存在する山間部や田舎の特徴を日本の都市の特徴と勘違いしている。以上のことは既に第8節、第10-1項、第12-1項でもみた。鈴木博之（1999, p.32）が、伝統的日本都市の建物の例として当時都市といえる所ではないペリー来航時の浦賀の建物をあげているのは田舎の特徴を日本の都市の特徴とみなす極端な例である⁵²。

江戸は大きな田舎、好意的には、田園都市と評される。槇（1992, p.228）は、東京は「武蔵野の森がまだ美しかった頃は〈偉大な村〉であった」とパラドックスのように言う。これは、日本では都市と自然が対立概念ではないためであると説明される。しかし、江戸が大いなる田舎であるというのは定義の問題で

⁵² 鈴木博之（1999, p.32）によればペリーが日本のわらぶき屋根をみて「巨大な穀物の堆積物のよう」と軽蔑したのも、鈴木が「もっともだ」というように引用しているのも不思議である。イギリスにはわらぶき屋根はいくらでもあった。現在も残る。日本には少ないわらぶき職人も残る。ある人が私に指摘したのだが、M. Thatcher 首相の夫はわらぶき職人の子孫であろう。引用文の前にあるペリーが先入観なしに見たという、鈴木への理解も誤りだろう。

ある。旧東京市山の手地域を都会と呼べば確かに江戸は大いなる田舎であるが、下町部分のみを都会と考えれば全くの都市である。田舎を都市と呼べば、田舎のような都市であるのは当然である。明治政府が大名・旗本屋敷、つまり山の手部分を茶畑、桑畑にしようとした⁵³のは、山の手地域は都市部でないと認めていたことを意味しよう。

多くの都市論者は東京山の手出身で、しかも東京人（都会人）意識が強いようである。そのため、自身の出身地域の山の手を典型的な都市部と考えていると想像される。山の手と言うのは正確ではなく、本当は山の中である⁵⁴。都市論者は東京で生まれ、東京で育ち、東京で教育を受け、東京に住みづけているというが、正しくは、山の中に生まれ、山の中の学校で教育を受け、そして山の中に住み続けているのである。日本の都市は田舎と区別がつかないという趣旨の主張がされるのは、自分の住む田舎を都会と思っているからである。都会人意識があるにもかかわらず都市生活をしていないからおかしな見解をいただく。

「東京には自己の帰属意識を空間的に確かめる手だてとして、あの西欧の広場が存在しなかった」（槇（1992, p.219））

というのは槇のような東京山間部の住人についての話であって、下町の人々、つまり東京の都会人にとって社寺とその境内は帰属意識を高めるところであった。芦原（1990b, p.239）はドイツの町で建物外側に植木鉢に植えた花が飾られているのに感嘆して、それがドイツ魂によるものであるという説明を得て納得しているが、家の前に植木鉢があって丹精を込めた花が咲いているのは東京の下町では当たり前のことであった。下町でなくても本郷菊坂町では見られたことであるが、山間部で生活していた芦原はこのような都会生活を知らなかつ

⁵³ この点は鈴木（1999）に詳しい。

⁵⁴ 「本郷もかねやすまでは江戸の内」という。かねやすとは現在の本郷3丁目あたりである。矢田（1975, p.125）を参照。

たのであろう。

都会人意識と現実の捩れのために、都市論者は日本の山の中をヨーロッパ都市と比べて山の中の特徴を日本の都市の特徴と考える。このような捩れの生じたのは、明治維新で田舎者に都会であった江戸が占領され、占領した田舎者は文明開化の担い手となる一方で、江戸周辺の山間部に住んだため、自分たちが文化の担い手としての都会人種という意識とともに自分たちの住む山間部を都会と見るようになったためと思われる⁵⁵。

都市論者の都市概念の混乱にはもう一つ要因がある。壁で囲い、中心に広場を配置し、内部を格子状道路で区画した計画的につくられた古代ギリシア・ローマの植民都市を都市の規範と都市論者は考えている。彼らは、中世以降現代に至るヨーロッパ都市も古代ギリシア・ローマの規範に沿ったものであると考えている。しかし、槇がしばしば言及するミレトスをはじめとする古代ギリシア・ローマの植民都市は都市と言えるであろうか。陣内（1988）によれば、現在のフィレンツェ・パドヴァの始まりとなったローマの植民都市は 500m×700m の長方形の小さな町にすぎず、周囲の農地開拓のための拠点だったようである。古代ギリシア・ローマの植民都市は敵対的周囲から自己防衛をするために武装した農民組織、または農民を守る軍事組織の砦というべきものであったというのが正しいであろう。（以上についてはさらに補論を参照されたい。）都市は非農業・非鉱業経済活動の中核とする人間の集積地と理解するのが適当であろう。また、第6節でみたように槇等の都市論では都会人と農村人の区別を重要と考えている。このような都市の定義に基づけば、古代ギリシア・ローマの植民都市は都市と考えるべきではなく、むしろ農村と理解する方が正しい。

植民都市という日本語はラテン語 *colonia*、またはその英語化 *colony* の訳である。*colonia* は、農民を意味する *colonus* に由来する言葉である。コロヌスは中

⁵⁵ このような意識の捩れは磯田（1990）に詳しい。

世の農奴の起源とされることがある古代ローマ後期の零細小作農民を指す術語ともなる。したがって、言語的にも、植民都市というのは農村と考えるのが正しい。都市論者の論点は、農村に近い、都市でないもの（屯田兵村というべきもの）を都市と誤解し、それを規範として現実の日本都市と比べることによって生じたものでもある。

第 14 節 第 II 部結語：都市論の思想とプロパガンダ

第 II 部では都市論で深刻に論じられる主要な 7 つの論点を取り上げた。それらの論点は事実誤認にもとづくか、事実誤認でない場合には思想・精神といった曖昧な概念で明確な事実を説明しようという非科学的な主張であり、しかもその説明は他の事実と齟齬をきたしている。さらには、各論点で対象となっている現象は事実認識が正しい場合、とるに足らない現象として簡単に経済的・軍事的に説明できることを見た。日本都市とヨーロッパ都市の形態上の差は自然条件の差によるものであった。更に、都市論の定説は、都市・自然という基本用語の概念上の混乱によって生れたこともみた。本論は、「（都市論者の）精神（ghost, 幽霊という意味にもなる）の正体みたり枯すすき」であることを示した。

この結語では、特定の論点ではなく、都市論にみられる思考上の一般的特徴を論ずる。

14-1 インテリジェント・デザインと儒教

鈴木博之（1999, 第 1 章）にはかなりはっきりと表現されているように、日本都市が混乱を極めているのにヨーロッパ都市が美しい理由を知りたいというのが都市論者を動かしている中心的な問題意識である。そして、都市論者の答えは、一言でいえば、第 II 部最初に鈴木博之（1999）から引用したように「ヨーロッパ精神が作った」である。この答えは神の存在証明と同じである。例えば、「自然は美しく、星辰の動きは美しい法則性を持っている。このように自

然が素晴らしいのは、誰か至高の存在がデザインしたとしか考えられない。至高の存在、それは神である」という理論と変わらない。形態の背後にある隠された意味をさぐるというのも中世神学的である。現在のアメリカで神による創造がその支持者によってそう呼ばれるように、intelligent design と都市論も呼べよう。

芦原によれば、家の内と外を区別しないヨーロッパ人は、我々が家の中を美しくするように家の外を美しくしようとするのでヨーロッパ都市が美しい。例えば、

「わが国では伝統的に内部空間に空間秩序としての優位性を認め、外部空間・・・の美化を考えても、外部空間の公共空間の美化を考えることは稀であった」（芦原（1990b, p.107））または、日本人は「内から眺めることの優位性のために・・・外観にはとかく無頓着で、外部秩序の整備といった・・・発想につながらない」（芦原（1990b, p.25））、「日本人は、どうして建物の外観とか・・・これほど無頓着なのであろうか」（芦原（1990, p.28））

と芦原は言う。（この芦原の見方は、第12-12頁で誤りであることを示した。ファサードを日本人は重視しないという見解につながる。）「公德心がないから街が汚れる」に似たこの見解は、個々の人が道徳的倫理的に立派になれば世の中は素晴らしくなるという儒教に代表される社会理論を踏襲している。鈴木博之（1999, p.13）は、「日本の都市が美的でなく、混乱と無秩序に満ちている」のは、永遠を実体として表現し、とどめるという精神がなく、その場限りの今しか日本人は考えないため（直ぐ消滅するものを美しくするのは無駄だからの意？）と言っている。（だれでもヨーロッパ人も花火を美しいと思うはずであるが。）この表現では、鈴木の見方は儒教の伝統だろう。

ある社会状態が存在するのは誰か、たとえば神が意図したからとは限らない。社会を構成する個々の主体の意図や道徳性と社会現象は直接には結びつかない。神のような中央集権的計画者によるデザインがなくとも、個人が卑しい利

己的動機に動かされていたとしても、むしろそれ故に経済厚生は高まることもあり得るし、動植物界では弱肉強食であるが故にエコロジー秩序が保たれてそれぞれの動植物が生存し続けうるよい環境が生じる。大自然の美しさは神が意図したためでも、そこに生きる動植物がそうなるように努めたためでもない。それは、動植物が他を押しつけてでも自分が生き残り、子孫が繁栄するように努力した意図せざる結果である。

都市の景観がそこに住む人の精神の差という都市論は、自然条件に対する適応の結果にすぎない肌の色が人種の精神の差とかかわりを持つと示唆する人種差別主義者の議論のように、私には響く。都市論者が精神を重視するのは、旧帝国陸軍の制裁や柄の悪い運動部のシゴキ、または左翼のリンチを思い起こさせもする。精神論は日本独特の物ではないが、日本社会の悪い面には例外なくといっていいほど伴うものであることも付け加えたい。

14-2 自然と設計主義

都市論者は、日本とヨーロッパおよび他の地域との間で思想的哲学的意識的等々の差があつて、その差のため都市の形態上の差が生じると論ずる。これは、第I部でみた文化論のパターンである。これに対して、第I部でみた科学的方法に従つて、私はどの地域の都市も同じ原理によって作られたと思う。一見した形態上の差は、それぞれの地域に存在する自然条件（地勢、気候、緯度等々）の差に同じ原理が働いた結果生じたものであると考える。

都市論者は、人間の理念や思想が都市を計画的に形作るという設計主義的見方をとっている。日本都市に中心性がないとか、日本都市はモザイクの組合せとか批判し、計画的都市をよしとするのは、都市論者が中央集権計画主義者であることを示している。芦原等の考えは結局、ヨーロッパの街並みが美しいのはヨーロッパ精神の所産であるから、この精神を理解し体现している自分が日本の都市を計画すれば日本の都市は美しく改造できるということである。やはり、彼らは中央集権的計画主義者である。都市論者は設計主義をヨーロッパの

思想と考え、中央集権の計画主義者・設計主義者であるのは当然のこととされているのかもしれない。都市論者は、自然条件の差による都市形態の説明を、自然と人間（都市）を対立したものは見ない日本の自然融和観の一つと思うかもしれない。しかし、ハイエクによればヨーロッパ思想の伝統では、設計主義は18世紀以降現れた新思想である。都市論者の設計主義的都市観は、19世紀中頃に西欧文明に接した日本人がその当時の流行を本流と勘違いしたためと言えるかもしれない。

同時に、私は、日本は設計主義が伝統的社会思想の国と思う。欧米との対比で論じられる、都市論をはじめとする多くの設計主義的社会理論は、人間についての教訓がイソップ物語では動物社会に仮託して語られるように、日本の伝統的社会思想が欧米人の社会に仮託して語られているのだと思う⁵⁶。都市論者がヨーロッパ的と誤っていう計画的な都市の設立・格子状態道路・自然の支配は、実は日本の伝統的都市思想であることはみた。

14-3 プロパガンダとしての都市論

都市論は単なるアカデミックな都市分析ではない。第I部では、曖昧な概念で具体的で明確な事実を説明しようとする非科学的社會理論の多くは政治的プロパガンダであると主張した。都市論もその一例である。伝統的な都市理論の教宣活動の一環であることは既に前項でみた。さらには、都市論は、欧米流建築技術を学んだ建築家が自分たちの活動領域や自分たちへの需要を増し、施主や世間一般に対して自分たちの主張を押し通すのに都合の良い土壌を作り出す

⁵⁶ A級戦犯が戦争責任のないことを種々に主張したのは筒井（2006）のいうように単に死刑を免れるためだったのに、丸山眞男は、日本人にはヨーロッパ人と違って主体的責任の観念がないからといったような議論を展開した。丸山の主張もヨーロッパ人に仮託して、日本の通俗的倫理を述べた例である。つまり、丸山は、『遠山の金さん』『大岡越前』『水戸黄門』のクライマックスシーンでの主人公のように「この期に及んであれこれ申し立てて身に覚えがないとは見苦しい。潔くありのままを申せ、潔くお縄に付け。」とA級戦犯達に言っているのである。ヨーロッパ裁判では当然とされたが、江戸時代の日本の刑事裁判では認められていなかった被告の無罪の推定といった考えは、丸山眞男は持たなかった。

ためのパブリックリレーションである。都市論は簡単に言えば、現在皆さんの住んでいる家・街は（本論文で検討したいいくつかの理由で）みっともないですよ、人に笑われますよ、新しい現代的な恥ずかしくないファッションの（文明開化にふさわしい）家を立て替えましょう、都市形態を変えましょうということであって、もっともらしい理由をつけた服装または化粧品業界による新ファッションのプロモートのようなものである。自然と都市の対立を良しとするのとは逆転して現在では自然と融和した緑のある都市が良いと都市論者や都市計画家が提唱するのは、ミニスカートの後はロングスカートを流行させようとするのによく似ている。都市論は公権力による都市計画・改造のための政治プロパガンダでもある。都市論は公権力による都市改造を不承不承ながらも人々が受け入れざるを得なくする雰囲気醸成しようとするものでもある。

誤った認識、プロパガンダに基づいた行動は失敗に導く。したがって、都市論のプロパガンダは社会に大きな害を及ぼしてきた。都市は自然条件に適応したものとして発展してきたのに、自然条件を無視した都市論による都市計画・改造は自然条件に不適合な、したがって住みにくい都市を造る。ここではその卑近な例を2つあげる。卑近な例をあげるのは都市論の害が一般的で我々の日常生活に関連する問題であることを示すためである。

鈴木博之（1999, p.25）によれば、ル・コルビュジェは建築から場所性（自然条件との関り）を奪った人である。コルビュジェはコンクリート打ち放し建築を考案した人でもある。日本のコンクリート打ち放し建築は醜い。この建築法は乾燥した南フランスの気候を暗に前提としたものである。湿度が高く雨量の多い日本では、コンクリート打ち放しのザラザラした、水を吸収しやすい肌には、直ぐ汚い水の跡ができ、黒々としたカビが大量に発生する。建築から場所性は奪えず、建築は自然に適合したものでなくてはならない。

第1図の写真は筑波大学の建物の配置を示している。陣内（1992, p.215）によれば広場は建築家・都市計画家の憧れである。第1図を見れば誰もが、建築



第1図 広場の夢

家・都市計画家の都市城壁に囲まれた広場（アゴラ）の夢（ギリシャ都市の幻影）をモルモット大学で実現させたと理解するであろう⁵⁷。この何の役にも立たない大きな広場は、日射しの強い夏，梅雨・秋雨の頃，からっ風の冬，つまり1年のほとんどの期間楽しく歩けるような所ではない。その場所を他の建物での用事には長い時間通らなければならない。当然，居間にはならない。広場などなく建物同士がもっとくっつき合っていればずっと何事にも便利である。先に引用したように槇（1992, p.219）によれば広場は自己の帰属意識を空間的に確かめる手だてであるが，この広場は筑波大学への帰属意識を高めない。それどころか，先に見たように高温多雨な日本では雑草が強い。人工基盤の上に

⁵⁷ モルモットは某筑波大学名誉教授のある会議での表現である。

あっても広場に敷いてあるタイルはほっておけば雑草に覆われてひっくり返されてしまう。高い人件費のつく労働集約的な除草とタイルのメンテナンスは無用の財政負担となって大学を苦しめる。都市論にみるような設計主義の日常的な悪をここにみることができる。

補論 水供給と古代ローマ都市パリの性格

古代ローマ都市パリ（当時の名称はルテティア）の水供給は、ローマ水道が都市住民への生活用水供給というより、農業用水供給のためであり、したがってローマ植民都市が都市というより、武装した農業拠点または屯田兵村という方が正しい理解であるということを示唆している。

古代都市パリはシテ島とセヌ川左岸のサント・ジュヌヴィエーヴの丘（現パルテノン）の周囲に発展した町であった。この都市には、南方から水を運ぶ延長 15km に及ぶローマ水道があった。城壁で守らなければならない古代ローマ植民都市が飲料水を遠方の水源に依存するのは軍事的に見て得策でない。後でみるように人口も少なく飲料水需要も大きくないから、飲料水・生活用水はわざわざ大きな費用をかけて、遠方から供給するのではなく、井戸を使うか、すぐ近くのセヌ川の水を人力または獣力で運んで使用すれば良いはずである。濁っているというならば漉して使えば良い。だから、古代パリのローマ水道の目的が生活用水の供給のためというのはおかしい。

大量に必要な農業用水は人力または獣力によってすぐ近くのセヌ川から得るのは不可能である。農業用水をセヌ川または他の川から引くとすれば高低差からいってかなり上流から引かねばならない。15km 南の泉から水を引くのが良かったのであろう。ちなみに、松井（1997, p.235）によれば、1853 年頃工業用水等も含めたパリの 1 日の水供給量約 13 万 m³の内 10 万 m³は東方 50 km 離れたウルク川から引いていた。

古代パリの水道の供給量は生活用水としての水使用量を大幅に上回る。ピッ

ト (2000, p.36) は古代パリの水道による水供給量は 1 日当たり 2 千 m^3 としている。古代パリの人口は 5 千~6 千としている。水使用量を 1 日 1 人当たり 0.2 m^3 (私の使用量) とすると、古代ローマ都市パリでは 1 日当たり千 m^3 ~1.2 千 m^3 しか生活用水は必要でなかったことになる。19 世紀中頃のパリでの 1 日 1 人当たり使用量のオスマンの推計は工業用水を含めて 0.11 m^3 である (松井 (1997, p.265) 参照)。この数字を使えば、古代ローマでの生活用水使用量は 1 日当り 550~660 m^3 となる。いずれにしても著しく供給量より少ない。水は流し放しであったから供給量と使用量の差が出るというなら、水道の口径を小さくし水供給量を減少させ (建設コスト削減効果大)、ルテティアに溜池を作った方がよかったはずである。

ピットの 2 千 m^3 の供給量は少なすぎるように思われる。ピット (2000, p.36) によれば水路の口径は 0.4m×0.5m である。口径が内径か外径かは示していない。水供給量が 1 日 2 千 m^3 であれば、内径を 0.3m×0.4m とすると平均流速はたかだか時速 700m (秒速 20cm) 程度でしかない。これでは遅すぎて水が汚れてしまう。間欠的にしか水は供給されなかったとすれば、なぜ水路の口径をもっと小さくして水を連続的に流さなかったのであろうか。その方が建設コストが低い。

以上のような水供給量と生活用水使用量の不整合を解決するにはローマ水道の目的が農業用水の供給であると考え以外ないと思われる。

参考文献

- 青木 保 (1977) 『日本文化論の変容』 中央公論社。
芦原義信 (1990a) 『街並の美学』 岩波書店。
芦原義信 (1990b) 『続 街並の美学』 岩波書店。
芦原義信 (1994) 『東京の美学』 岩波書店。
磯田光一 (1990) 『思想としての東京』 講談社文芸文庫。

- 上野昭雄 (1998) 『地図で見る百年前の日本』 小学館.
- ウェーバー, M. (1988) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 大塚久雄訳 岩波書店.
- 大竹文雄 (2005) 『日本の不平等』 日本経済新聞社.
- 大塚久雄 (1966) 『社会科学の方法』 岩波新書.
- 小谷 清 (2004) 『現代日本の市場主義と設計主義』 日本評論社.
- 川添 登 (1993) 『東京の原風景』 ちくま学芸文庫.
- 久米邦武 (編) (1977) 『米欧回覧実記』 岩波文庫.
- 黒坂勝美 (1964) 『国史大系第 38 卷 徳川実紀 第一篇』 吉川弘文館.
- サールマン, H. (1983a) 『中世都市』 福川裕一訳 井上書院.
- サールマン, H. (1983b) 『パリ大改造——オースマンの業績』 小沢明訳 井上書院.
- シェイヴァー＝クランデル, A. (1989) 『中世の美術』 西野嘉章訳 岩波書店.
- 陣内秀信 (1992) 『東京の空間人類学』 ちくま学芸文庫.
- 陣内秀信 (執筆協力 大坂彰) (1988) 『都市を読む*イタリア』 法政大学出版会.
- 鈴木博之 (1999) 『日本の近代 10 都市へ』 中央公論新社.
- 鈴木理生 (2000) 『江戸はこうして造られた』 ちくま学芸文庫.
- 筒井清忠 (2006) 『二. 二六事件とその時代』 ちくま学芸文庫.
- 東京地図研究会 (2006) 『地べたで発見「東京」の凹凸地図』 技術評論社.
- 西岡常一 (2003) 『木に学べ』 小学館文庫.
- 新渡戸稲造 (1997) 『武士道』 奈良本辰也訳・解説 三笠書房.
- ピット, J-P. (2000) 『パリ歴史地図』 木村尚三郎監訳 東京書籍.
- ベネディクト, R. (1977) 『菊と刀』 長谷川松治訳 教養文庫.
- 堀晃明 (1996) 『広重の大江戸名所百景散歩——嘉永・安政 江戸の風景 119』

人文社.

松井道昭 (1997) 『フランス第二帝政のパリ都市改造』 日本経済評論社.

槇文彦 (1992) 『記憶の形象 都市と建築の間で』 筑摩書房.

森島通雄 (2004) 『なぜ日本は行き詰ったか』 岩波書店.

森田悌 (2006) 『日本後記 上』 講談社学術文庫.

師橋辰夫 (監修・解説) (1995) 『嘉永・慶応 江戸切絵図』 人文社.

矢田挿雲 (1975) 『江戸から東京へ (一)』 中公文庫.

渡辺浩 (1985) 『近代日本社会と宋学』 東京大学出版会.

レッツ, R.M. (1989) 『ルネッサンスの美術』 鈴木杜幾子訳 岩波書店.

Hayek, F. (1973) *Law, Legislation and Liberty* London: Routledge & K. Paul.

Popper, K. (1959) *Logic of Scientific Discovery* London: Hutchinson.